

佐賀県立九州陶磁文化館

研究紀要

第 7 号

実体顕微鏡写真による有田磁器の真須の変遷研究

・・・・・ 井上康彦・大橋康二

19世紀後半における有田と三川内の輸出品に関する研究—薄手磁器を中心として—

・・・・・ 鈴田 由紀夫

柴田夫妻コレクションにみる銘款集成2—延宝様式の時代—

・・・・・ 宮木 貴史

2022

佐賀県立九州陶磁文化館

はじめに

このたび佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第7号を刊行しました。

当館は、昭和55年（1980年）に九州陶磁に関する文化遺産の保存と陶芸文化の発展に寄与する目的で設立され、以来、多面的な活動を行ってきましたが、重要な活動の一つとして調査研究にも力を尽くし、研究紀要や展覧会図録等での成果を公にしてきました。

当館における調査研究活動をより充実させ、今後の展示及び教育普及に活用するために、研究紀要の刊行を進めており、第7号では、染付磁器に欠かせない顔料である呉須の変遷を研究した論考や、有田と三川内の薄手磁器についての研究、前号に引き続き柴田夫妻コレクションにみられる銘の紹介といった調査研究の成果を収録しました。

今後も、当館の設立目的にありますように、九州の陶芸文化の発展に寄与するべく九州陶磁に関する調査研究に尽力し、その成果を逐次報告したいと存じますので、皆様方の御叱正、御指導をお願い申し上げます。

令和4年（2022年）3月

佐賀県立九州陶磁文化館

館長 鈴田 由紀夫

目次

はじめに

論考

実体顕微鏡写真による有田磁器の呉須の変遷研究

・ 井上 康彦・大橋 康二 ・・・・ 1～37 頁

19世紀後半における有田と三川内の輸出品に関する研究—薄手磁器を中心として—

・ 鈴田 由紀夫 ・・・・ 38～67 頁

柴田夫妻コレクションにみる銘款集成 2— 延宝様式の時代 —

・ 宮木 貴史 ・・・・ 68～85 頁

実体顕微鏡写真による有田磁器の呉須の変遷研究

井上康彦・大橋康二

1. 実体顕微鏡による有田磁器の写真撮影について

(1) 用いた機材

●実体顕微鏡・LEIKA MSS

・接眼レンズ×10・対物レンズ×1・ズーム機能は0.63・1.0・1.6・2.5・4.0がある。

*高ズーム機能は被写体の明るさに問題があり1.6ズームを選択した。

●デジタルカメラ・RICOH WG-20

・白磁部の撮影は適正露出で行うと目立たない。露出はややマイナスにする。

(2) 観察方法

①デジタルカメラ通常撮影

・全形、一部の通常撮影はRICOH WG-20で撮影した。

②デジタルカメラ拡大撮影

・拡大撮影はRICOH WG-20で焦点距離1cmにセットし5cm～10cmで撮影した。

③実体顕微鏡+デジタルカメラ拡大撮影

・実体顕微鏡は1.6ズームでセットした。RICOH WG-20を2.7ズームに統一し、実体顕微鏡の接眼レンズにセットし撮影した。

・RICOH WG-20 焦点距離1cmは拡大撮影となる。

・実体顕微鏡の対物レンズは1×、接眼レンズは10×である。ズーム拡大機能は0.63、1.0、1.6、

2.5、4.0がある。今回の撮影で1.6ズームの実体顕微鏡倍率は16倍となる。

2.6、4.0ズームで撮影するにはリングライトなどを設置して被写体を明るくすれば可能である。

・RICOH WG-20 焦点距離1cmの撮影の倍率は不明。2.7ズームを選択、実体顕微鏡+RICOH WG-20の倍率は43.2倍となる。撮影写真をパソコンに入力する。パソコン画像を拡大ズームで観察すれば100倍以上の観察ができる。例；中国磁器・清朝前期官窯と推測される作品の白磁部を拡大すればムライト($3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$)の柱状結晶が観察できる。日本磁器、中国磁器民窯作品は釉薬内の気泡が多くムライトは観察できない。断面を磨き観察する方法が考えられる。

④寸法の計測について

・顕微鏡の被写体の計測方法の一つに対物マクロメータ 1 cm (0.1 mm × 100) を採用した。磁器片撮影と同じ条件で対物マクロメータを撮影し画像をパソコンに取り込む。パソコンのペイント機能を用いて対物マクロメータ写真を 1 mm (0.1 mm × 10) に切り取りを行う。切り取りした写真を磁器片写真に貼り付けを行った。これにより気泡、呉須粒子、未溶融粒子 (0.01 mm 以下も確認可) などの寸法が確認できた。

釉薬・素地の融点について

釉薬の主成分は長石である。長石の融点は通常 1300°C で熔け出す。塩基物質 (木灰・石灰など) を入れることで融点が下がる。この時の長石の融点 (浜野 1956, 李・浜野 1973) は 1150°C で熔け始め 1300°C で完全に熔ける。

江戸時代の釉薬配合は分からぬが窯内の温度は観察材料の熱膨張粒子の有無と割合、半溶融粒子の有無と割合、気泡の透明度・大きさの計測、半透明に溶融したガラス質化で判断した。

(3) 観察結果 (呉須を中心に記載する)

●天神森窯 (有田町)・生掛け・1610 ~ 1630 年代・5 点の観察結果

釉薬・素地は溶融し半透明になったガラス質の中に熱膨張・半溶融した粒子が混在。

釉薬層は半溶融～熱膨張した粒子が多く混じる作品と、粒子が溶融した半透明でガラス質の試料がある。ガラス化した釉薬層内の気泡は大きく数も多い。気泡も透明と白濁している試料がある。白濁気泡は窯内の温度不足が原因であろう。

釉薬層に呉須粒子が点在し数量も多い。

素地は生掛けで水分蒸発と結晶水の放出時に呉須が剥離したのであろう。

呉須発色が悪い試料がある。呉須発色の悪い試料は素地も熱膨張～半溶融粒子が多い。窯の構造による還元温度の不足と酸化炎の発生が考えられる。

●天神森窯のまとめ

・釉薬内に熱膨張した長石の粒子があり、窯内温度は 1000°C ~ 1150°C の範囲であろう。短時間、1200°C に達した可能性がある。素地の中心部は熱膨張粒子が観察され 1150°C の可能性がある。
・試料 5 点を観察した。“白い焼き物”を作るため窯内温度を上げるのに苦労している。苦勞の跡が試料にあらわされている。

●窯ノ辻窯 (武雄市山内町)・生掛け・1630 ~ 1640 年代・10 点の観察結果

窯の構造・釉薬が天神森窯より改善されたのであろう。釉薬・素地に熱膨張粒子は観察できな

かった。半溶融した長石粒子は観察される。

釉薬層は見ためには完全溶融に近いが半溶融の粒子が多く点在する。粒子は天神森窯より少ないと混在する。釉薬層内の気泡が小さくなり透明度が上がった。

釉薬内に呉須粒子が点在するが天神森窯よりも少ない。

呉須発色の悪い試料がある。呉須発色の悪い試料は素地も半溶融状態で還元温度の不足、窯の構造により酸化炎が発生したのであろう。

●窯ノ辻窯のまとめ

- ・天神森窯より試料のレベルが上がっている。レベルを上げるため、窯設計、釉薬が改善されたのであろう。
- ・試料の仕上がりは安定してきた。熱膨張した長石の粒子は確認できない。半溶融状態の粒子は観察できた。窯の温度は天神森窯よりも高いことが分かる。1150°C～1200°Cの範囲であろう。
- ・天神森窯と比較して白濁の気泡は少ない。気泡の大きさは同程度である。窯の構造が変わり還元焼成温度が上がり、呉須発色も良くなつた。
- ・呉須粒子は天神森窯と比較して少ない。

●長吉谷窯（有田町）・素焼・1655～1670年代・7点の観察結果

中国から技術が導入され、窯ノ辻窯より試料のレベルは格段に上がり現代試料に近い。

釉薬内に半透明になった長石の微粒子が存在する作品もあった。現代試料でも半溶融した粒子は存在する。

釉薬内の気泡は窯ノ辻窯よりも小さくなつた。釉薬内の気泡が多いのは日本磁器の特徴である。

清朝前期・官窯磁器と推測される作品は釉薬内の気泡は小さく少ない。この試料は日本磁器より焼成温度が高く 1350°C～1400°C であろう。

素地は素焼きされている。素地から結晶水が放出されない。呉須層は安定し、粒子の浮き上がりは少なくなった。試料 5 点とも呉須粒子を観察できなかつた。呉須発色は安定した。

●長吉谷窯のまとめ

観察をする限り現代試料と変わらない。自宅に 50 年前～40 年前に集めた各地のコーヒー茶碗がある。染付試料と同じ方法で観察した。現代作品でも長石の半溶融粒子が存在する試料から微粒子が観察できない完全溶融の試料まである。

- ・素地はまだ完全溶融に至っていないが、有田の窯業技術は長吉谷窯で確立された。
- ・窯内の温度は 1200°C～1250°C であろう。

● 桶口窯・素焼・1690～1860年代・36点、柿右衛門窯・素焼・1690～1730年代・1点、南川原窯ノ辻窯・素焼・1690～1730年代・1点の観察結果

桶口窯は操業年代が長く、観察試料の年代も幅がある。大まかに分けると 1690～1730 年代、1690～1740 年代、1700～1750 年代、1730～1750 年代、1740～1750 年代、1740～1760 年代、1750～1770 年代、1780～1810 年代、1800～1840 年代、1810～1840 年代、1820～1860 年代、1840～1870 年代に分けることができる。

窯の操業年代が長いことにより製品にバラツキがある。1700 年代末期までバラツキがある。1800 年代に入り、安定した試料ができるようになった。素地は完全なガラス質化となった。1790 年代に入ると呉須原材料の質が落ち呉須剥離が目立つ試料が出てきた。窯業技術は確立したが新たに呉須材料による問題が出てきた。製品の中に剥離が目立たない試料がある。良質の呉須確保ができたのか?、呉須を精製したのか?、良質呉須とそうでない呉須を配合したのか?

● 桶口窯・柿右衛門窯・南川原窯ノ辻窯のまとめ

- 登窯が大規模となり、焼成窓数も増加したことにより高温焼成温度のバラツキ、製品の出来具合が試料に表れている。
- 素地のガラス質化にもバラツキがあり、窯内の温度は 1150℃～1300℃の範囲と思われる。
- 1850 年以降の試料をみると限り素地は完全に熔けている。有田窯業技術の完全な確立はこの時代であろう。その中で柿右衛門窯・南川原窯ノ辻窯・藏春亭三保作品の出来はよく焼成温度(1250℃～1300℃)は高く安定し呉須の発色も良い。

(井上康彦)

2. 肥前染付磁器に用いられた呉須の研究について

(1) 呉須の差異に影響を与える要因について

肥前の染付磁器生産は 1610 年代頃に始まった。染付の顔料である呉須、コバルト青料は中国から輸入されたものを用いたと考えられている。記録から「絵葉は中国から輸入された。その手続きは、まず、長崎の輸入業者によって落札させ、仲買人の手を経て荷改めを受け、その証明書を副えて皿山へ送られたものを、郡目附が荷改めをしたのち買主へ渡された。」(宮田 1975) しかし、中国から輸入された呉須の品質差があり、長崎の「目利」がこの品質差を決め、価格にも反映されたとされることから、当然、窯によって品質の差がある呉須を使用したと考えられる。

記録から磁器の絵薬（呉須）が享保年代（1716～1736）に輸入禁止になったが、間もなく解除されたことがあるが、これは佐賀（鍋島藩）と平戸（松浦藩）が磁器は将軍への献上に必要であると主張した結果と推測されている（山脇 1964）。

この呉須によって描かれた染付は肉眼観察では時代によって青色の色調が異なって見える。その要因として考えられる点をあげると、1650 年代頃を境に、それまでは生掛け焼成という、素焼をせず本焼 1 回だけの焼成から、1650 年代には有田で素焼が始まる。この影響がどの程度あるかどうかである（イ）。

そして、中国から輸入される呉須が時代によってどの程度、品質の変遷があったかである（ロ）。江戸後期に呉須の輸入量が減少するとともに、品質も低下したことは、後述する享和 2 年（1802）の記録（宮田 1975）に「皿山窯焼用茶碗薬の儀、近年払底」したことが記されることなどからうかがえる。

（2）観察資料の選定について

上記（イ）、（ロ）の 2 つの点を考慮して、佐賀県立九州陶磁文化館（以下、九陶と略す）保管の陶片資料から生産窯の試料の選定を行った。

（イ）の点を明らかにするために、素焼をしない生掛け焼成の時代の有田町天神森窯（1610～1630 年代）と武雄市山内町窯ノ辻窯（1630～1640 年代）を選定した。この窯ノ辻窯がある板ノ川内山は、当時、有田皿山の 1 つであり、技術水準からも有田と考えてよい。そして素焼を行い始めた段階の主要な窯として、有田町長吉谷窯（1655～1660 年代）を選んだ。

（ロ）の点を明らかにするために、有田磁器の色絵が 1690 年代頃に柿右衛門様式から金襷手様式に変化し、染付磁器の海外輸出は 1684 年の清の展海令以後、減退したと推測されるが、その影響があるか否かをみるために、1690～18 世紀前半に位置づけられる有田町柿右衛門窯出土品 1 点（これは柿右衛門古窯で焼成されたものではなく、おそらく有田町南川原窯ノ辻窯で焼成されたものと推測される）、南川原窯ノ辻窯出土品 1 点、有田町桶口窯出土品 9 点、18 世紀中葉～1770 年代までの桶口窯出土品 6 点を選ぶ。その後の 19 世紀までの試料として、次にあげる分析結果から選定した 1780～19 世紀中葉の桶口窯出土品 17 点である。

シンクロトロン光による呉須顔料の非破壊分析ではマンガン、鉄、コバルト三角座標ダイヤグラムで検討した（太田他 2019）が、17 世紀では顕著な違いは認められない。17 世紀前半の方が 17 世紀後半のものよりマンガン量が比較的多い程度の違いである。18 世紀の桶口窯の例は 17 世紀前半の初期伊万里のものとマンガン量は同程度である。ところが 19 世紀の桶口窯の例は 2 例だけであるが、コバルト量が減り、マンガン量が極めて多く、江戸後期の記録で呉須の質が落ちたとあることや、実際の製品の呉須の色調など肉眼でも大きく違つてみえることに

つながることを指摘した。

このようにシンクロトロン光による呉須顔料の分析で、肥前磁器の(イ)と(ロ)の変化によって、呉須の成分も変化があることが認められた。さらに肉眼観察で変化が認められることについて、その変化の観察を実体顕微鏡観察するという新たな方法を井上康彦氏に提案され、有田の窯跡出土品から適当な陶片を選び実施していただいた。呉須部分が拡大写真でどのように見えるかを観察した。有田磁器 1610～1890 年代・64 点、有田磁器明治～大正・2 点、有田現代作品・1 点、中国清朝前期乾隆帝時代官窯（推定）・2 点、中国嘉慶年間民窯・1 点、中華民国居人堂銘 1916 年・1 点の計 71 点行ったが、同様の状態の試料や今回のテーマと直接関係ない試料は紙数の関係で割愛した。

（3）観察結果（図 1～図 24）

1610～1630 年代の天神森窯の染付の呉須をみると、線書部の呉須上の釉の気泡は大小が集まって複雑に絡み、呉須粒子はみられない。2 や 4 のように呉須線書部分の濃く溜まった部分は上の気泡はほとんどみられない。5 は窯の温度が低く、釉の気泡は多く大きい。中には白濁したものもあり、他と違い斑らにみえる。これが肉眼でみると黄ばんでみえるのであろう。そして呉須部分は気泡が少なく、呉須粒子が顕著にみえる。肉眼観察では黒ずんでみえる。

1630～1640 年代の黒ノ辻窯の染付の呉須をみると、6 では線書とダミの呉須に濃淡が明らかである。呉須の上の気泡は複雑に絡まり、不透明にみえる。呉須の粒子も認められない。

8 は肉眼観察では、呉須の発色が良い。拡大写真では染付線書部分の周りに大きな気泡が集まり、呉須線上にはかえって疎らにみえる。呉須線の濃さが濃いためかもしれない。9 も呉須の濃い部分は気泡がみえず周りに気泡が集まってみえる。10 は肉眼で呉須が黒ずんでみえる。より黒い線の部分は暗褐色で気泡は少ない。ダミの部分は暗い色であるが、茶色い気泡が並んでみえる部分がある。呉須粒子がかすかにみえる。11 は呉須の濃い溜まりには気泡はなく鉛色を呈す。他の呉須部分に大きな気泡が集まってみえる。12 は肉眼観察で呉須が黒ずんでみえる。呉須部分の気泡は大きいものと小さなものが密集している。暗褐色の周りにいくらか青みを帯びた部分が取り巻いてみえ、呉須の微粒子がみえる。

1655～1670 年代の長吉谷窯では素焼を行うようになる。13 の呉須は青く発色がよい。線書とダミで濃さが異なる呉須である。ダミの方が薄く、上に複雑に絡まり合った気泡で不透明にみえる。呉須の粒子はみられない。14 は呉須の線書とダミの両方ともに小さい気泡が散布してみえる。16 は呉須部分に大きな気泡が散布している。17 は肉眼観察で呉須の発色はやや暗い。呉須部分の上には気泡が少なく、周りに大きな気泡が集まってみえる。

1690～1730 年代の柿右衛門窯や樋口窯、南川原窯ノ辻窯の染付をみると、18 は呉須の線書で

あるが、呉須上に大小の気泡が集まってみえる。呉須の発色は良い。19も同様に呉須の発色がよく、呉須部分の上に大小の気泡が集まり、微細な気泡が連なってみえる。20は線書と薄ダミがあるが、線書部分に大小の気泡が集まり、薄ダミの方は小さい気泡のみがみえる。21は色絵素地であるが、薄い線書と濃淡のあるダミ部分である。淡いダミ部分の上に大小の気泡が多くみられる。濃いダミ部分の上には気泡は少なく黒っぽい。22は呉須の濃い部分の上に大きな気泡が散布し、薄い部分に大中小の気泡が密集して不透明にみえる。23の呉須も肉眼観察では黒ずんでみえる。線書とダミに濃淡がある。濃い線書の方が黒ずんでおり、上の気泡も少ない。濃さが淡い方が大小の気泡が多く散布し、白磁部分との境に気泡の密集がみられる。24は呉須の線書が淡い色であり、大小の気泡が多く集まっている。25は肉眼観察でも呉須の発色は良い。呉須の周縁に大中小の気泡が密集してみえる。26は欧洲向けの染付皿である。呉須の濃淡はあるが、呉須の淡い部分を中心に大小の気泡が散布している。

1730～1770年代頃の桶口窯の染付の呉須をみると、27は肉眼観察では呉須の発色は良い。呉須の部分は大小の気泡が散布する。白磁部分との境に気泡の密集がみられる。28は肉眼観察では呉須の発色は良い。呉須の線書とダミ部分である。呉須の上に気泡が複雑に絡み合っており、不透明である。よって呉須粒子は不鮮明である。29は28に近い。呉須の線書とダミの上に気泡が複雑に密集している。ダミの濃い部分は気泡が少なくみえる。30は呉須の線書部分であるが、大きな気泡が密集している。31は呉須の線書とダミの部分であり、線書の方が淡く、上に気泡が複雑に密集しており、不透明である。ダミの部分がより暗い色で気泡も少なくみえる。32は呉須の線書とダミの部分である。線書の方が暗い色である。より明るい青のダミの部分の上に、小さい気泡が厚く覆い、不透明である。33は釉が熔けず灰色を帯びる。釉が熔けていないため白っぽく、きれいな気泡になっていない。呉須はこの白渦した気泡に覆われ、不明瞭である。

1780～1820年代の桶口窯の染付の呉須をみると、34は肉眼観察によると、呉須の色は暗い色調であるが、呉須のダミ部分なので淡い色である。そのため上に大きい気泡が散布する。呉須の浮遊粒子がみられる。35は釉の熔け方が不十分である。呉須の線書とダミ部分であるが、線書の方が濃い。釉が十分熔けていないため、気泡も不鮮明である。36は肉眼観察では呉須が暗い色調である。呉須の線書部分であるが、呉須の上に気泡が多く散布する。呉須の浮遊粒子がみられる。

1800～1850年代の桶口窯の染付の呉須をみると、37は「松甫」銘の皿。肉眼観察では呉須が暗い色調である。呉須の線書部分は呉須が剥離し、表層に浮き上がってみえるのが特徴である。今までみてきた呉須の状態とは著しく異なる。呉須の浮遊粒子が多くみられる。38は色絵素地であるが、呉須は肉眼観察では暗い色調である。鉢の見込に描かれた龍の眼の部分であるが、

呉須が剥離し、浮き上がってみえる。呉須の周囲に気泡が集まってみえる。39は肉眼観察では呉須は青黒い。呉須部分は周縁に小さい気泡が集まってみえる。呉須の濃い滓が散在するが、点というよりつながったものが多い。ダミと思われるより淡い青の部分には小さい気泡がみえる。呉須の粒子も多い。茶色いものが少し点在するが、窯の天井からの落下物の一部であろう。40は肉眼観察によると呉須は青黒い。呉須のダミと思われる部分の拡大写真であり、呉須の滓が浮き上がり密集してみえる。周縁はそれが列をなしてみえ、ダミの重なりも認められる。呉須の上に気泡が散在してみえるが、ダミが重なり、より暗い色の上には気泡が少ない。41は肉眼観察によると呉須が青黒く、ギラッとした感じにみえる。拡大写真をみると、呉須の線書とダミ部分であるが、濃い線書に呉須の粒子がみえ、気泡の大きいものが点在するとともに小さい気泡が密集してみえる。淡いダミ部分は気泡が複雑に絡み合っており、不透明にみえる。42は焼成が不十分であり、肉眼観察でも呉須が黒ずんでみえる。拡大写真をみると、呉須の線書であるが、剥離して浮き上がり、黒くみえる。呉須の上に気泡はほとんどみえず、この回りの白磁部に小さな気泡がみえる。43は「南川原樋口造」銘の皿。肉眼観察では呉須は青黒い。拡大写真の呉須は線書とダミの部分である。濃い線書にダミをのせた部分の上には気泡はほとんどみられない。より淡い線書にダミ部分との境あたりに小さい気泡がみられる。44は「ヒ造」(樋口造)銘の皿。肉眼観察では呉須は暗い色調である。拡大写真は呉須の線書と淡いダミが加えられた部分である。白磁部と呉須線の境には大小の気泡が密集している。線書部分に呉須の粒子がみられる。45は「ヒ」(樋口)銘の皿。肉眼観察では呉須は暗い色調である。拡大写真は呉須の線書部分である。呉須線の周縁に大小の気泡が集まってみえる。呉須線部分には呉須の粒子がみられる。46は呉須の線書とダミの部分であり、呉須のより濃い方に大中小の気泡が多く集まってみえる。よって、呉須粒子はほとんどみられない。

1840～1870年代の樋口窯の染付の呉須をみると、47は「藏春亭三保造」銘の皿。肉眼観察では呉須の色調は暗くみえる。拡大写真では、呉須の線書とダミの部分があり、線書部分の上に気泡が複雑に絡み合ってみえるので不透明である。ダミの濃い方には気泡はみられない。48は「藏春亭三保造」銘の皿。肉眼観察では呉須の色調は暗くみえる。拡大写真ではダミ部分と思われるが、白磁部との境に大中小の気泡が集まってみえる。

3.まとめ

肉眼観察でみる呉須の違いがどのような理由によるものか、実体顕微鏡による観察結果でみてきたが、その要点を図25～27でまとめてみた。

焼成状態が良く、呉須の発色が良いと考えるもので、年代的な変遷でみたものが「呉須の比較1」、一方、焼成状態が良くなく、呉須が黒ずんでみえるものを年代変遷で比較したものを

「呉須の比較2」としてまとめた。「呉須の比較1」の呉須の色調が良いものの変遷をみる。初期伊万里の6では線書部分とダミ部分の上に大中小の気泡が複雑に絡み合ってみえる。次の13に比べると、呉須線が6の方が明瞭にみえる。この差には素焼をするか否かが影響している可能性が考えられる。13の方が白濁しているようであり、小さい気泡列が複雑に絡まり合っているようにみえる。19は良質の線書の呉須で描いているが、呉須の上に大きな気泡が集まつてみえ、小さい気泡列もみられる。白磁部ではより小さい気泡がみえる。35は享和2年(1802)の有田の皿山庄屋勘右衛門からの願書に(宮田1975)、

皿山窯焼用茶碗絵葉の儀、近年払底つかまつり、その上、よろしき薬持ち渡り申さず、一統
難儀に及び、罷り在り候処(窯焼一同が困っているところへ)近頃、幸い相応の葉見えたり
候につき、段々手を入れ示談に及び候処(略)

などとあり、1802年の前の近い頃、中国からの呉須輸入が減り、質が落ちて困っていたが、近頃、幸いにも適當な質の呉須がみつかり、交渉し試し焼きなどして、質が良いことを確かめたが、個人の力で購入することが困難であることなどを記す。文化6年(1809)にも皿山会所が呉須は中国の方でも手薄になり、日本への輸入が減って、価格が高騰し難渋していることを記す(宮田1975)。ように、呉須の輸入量が減り、供給が不安定となったことが知られる。それを反映したものとして、肉眼観察でも、それまでとは違つてみえるのが、35であるが、焼成の具合で透明釉が完全に熔けていないようにみえ、筆者が感じるギラッとした呉須の見え方ではない。それは35のように呉須の線書の上に大中小の気泡で覆われている。しかし、より淡いダミの中に線書の輪郭が6・13に比べてくつきりとみえ、強い呉須の濃さを感じる。これより、年代的に後になる図47は線書とダミの部分の気泡の集まり具合と輪郭が不鮮明である点は13・19に近いといえる。これは有田の豪商「藏春亭三保造」銘を持つ皿であるが、こうした有田で豪商銘を入れるものは前述の記録にみえる、より良質の呉須を入手できることなどの関係があるのであろうか。今後の検討課題である。

次に「呉須の比較2」にみる黒ずんだ色調の呉須の変遷である。生掛け焼成の初期伊万里の4では呉須線部分に大きな気泡がまばらにみえ、同じ初期伊万里でも良い色調の図25-6とはずいぶん異なることが一目瞭然である。さらに素焼を行う段階の17でもそれほど著しい差ではなく、呉須の上の黒ずみが強いところにはほとんど気泡がみられない。周縁に大きい気泡が集まってみえるのである。そして18世紀末の34でも呉須のダミ部分にまばらに大きな気泡が散在的にみえる。大きく異なるのは前述の記録後とみられる40である。呉須のダミ上にも呉須の滓で覆われ、縁に滓が連なつてみえる。呉須ダミの薄い部分中心に大きな気泡が散在してみえる。近い年代の図26-35とはずいぶん異なつてみえるが、焼成状態の具合で35の釉が完全に熔けていないためと考えられる。

以上の観察結果から、有田での呉須の顕著な変化はシンクロトロン光分析でもみられたことであるが、19世紀になり、コバルト量が減りマンガン量が極めて多く、記録上も18世紀末以降呉須の質が落ちたとあること、肉眼観察でも呉須の色調が青黒く、時にはギラつとした照りがみられるなどの変化があることを、今回の実体顕微鏡観察により、呉須が剥離し浮き上がつてみえること、また、呉須の浮遊粒子が多くみえることにもとづくことを明示した。

有田の初期伊万里段階でも、呉須が肉眼観察で黒ずんでみえる場合（図26-4）、呉須部分の気泡が少ないと、そこに呉須粒子がみえることによるものも明らかになった。そして、1650年代以降、素焼を行う段階で、17世紀後半に呉須が青く発色良好な場合（図25-13）、呉須の上に、気泡が複雑に絡まり合い呉須を覆う場合に青くみえるのであり、同時期でも図27-17のように、呉須上に気泡がほとんどないと青黒くみえることも分かった。

そして、草創期に多いが焼成不良で酸化気味の場合（図3-5）、釉は黄ばみ、呉須が黒ずんでみると説明してきたが、その場合の呉須部分には気泡がほとんどみられず、呉須粒子が多くみられ、白磁部分の釉は焼成良好の図3-6とはすいぶん違い、気泡も雑然とした状態で斑らに黄ばんだ凹凸のような状態にみえることもわかる。

以上のような肉眼観察だけでは明らかでなかった呉須のみえ方の変化のメカニズムを解明するうえで、この実体顕微鏡を用いた観察は、一つの有効な方法として試みられたものである。

（大橋康二）

参考文献

- 太田公典・大橋康二・梅本孝征・佐藤文子・澤岡織里郎 2019 「シンクロトロン光による呉須顔料の非破壊分析と比較研究」『東洋陶磁第48号』東洋陶磁学会
 浜野健也 1956 「長石質焼物中における石英結晶粒子の熔解の微構造的な研究」『窯業協会誌64』
 李應相・浜野健也 1973 「カオリナー長石系素地の焼き締り過程に関する研究」『窯業協会誌81』
 宮田幸太郎 1975 『有田畠山の制度と生活』神近桂二
 山脇悌二郎 1964 『長崎の唐人貿易』吉川弘文館

図版の凡例

- 図は試料の内外面写真（内面だけのものもある）と実体顕微鏡による拡大写真をあげた。
- 試料名の表記は次の順で表した。
 - 通し番号、試料の種類と器種、試料番号、出土墨跡名（所在地）、焼成が生掛け（素焼きをせずに本焼1回で焼く）か素焼きをしたもののかの別、推定製作年代
 - 拡大写真をみる上で参考となる特徴、推定焼成温度などを井上が記載した。
 - 写真是基本的に井上が撮影したものである。ただし一部試料の内外面写真で大橋が撮影したものがある。通し番号で記すと、28の内面、29の内面、32の内面、34の内面、40の内外面である。
- 試料は全て佐賀県立九州陶磁文化館保管資料であるが、所蔵については天神森窯、長吉窯、柿右衛門窯、樋口窯（19のみ佐賀県立九州陶磁文化館蔵）については有田町教育委員会所蔵であり、他は佐賀県立九州陶磁文化館所蔵資料である。

1. 染付皿 No.1・天神森窯（有田町）・生掛け・1610–1630 年代



- ・表面染付部・実態顕微鏡+デジタルカメラ拡大撮影(以下同じ)
- ・素地・釉薬は半透明のガラス質化の中に熱膨張した未溶融の白い粒子（長石・石英?）が数多く混在する。窯の温度は低く 1150°C～1200°C であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。



2. 染付皿 No.3・天神森窯（有田町）・生掛け・1610–1630 年代



- ・窯の温度は低く 1150°C～1200°C であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。



図 1

3. 染付皿 No.5・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



- ・窯の温度は低く 1150°C～1200°C であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。
- ・釉薬上に窯から落下した粘土粒がある。粘土粒子は中央に孔がない。



4. 染付皿 No.4・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



- ・窯の温度は低く 1150°C～1200°C であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。



図 2

5. 染付皿 No. 2・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



- 窯の温度は低く 1150°C ~ 1200°C であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- 素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となつて釉薬内に多く点在する。
- この作品では釉薬内の気泡は透光性が改善し数量も多く大きい。呉須粒子が顕著にみえる。



6. 染付皿 No. 9・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- 窯の温度は天神森より改善され 1200°C ~ 1250°C であろう。気泡も多く、大きいが透光性が高い。
- 呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。



図3

7. 染付皿 No.8・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



・窯の温度は天神森より改善され 1200°C～1250°C であろう。気泡も多く、大きいが透光性が高い。

・呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。



8. 染付皿 No.11・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



・窯の温度は天神森より改善され 1200°C～1250°C であろう。気泡も多く、大きいが透光性が高い。

・呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。・釉薬内の気泡は多く大きい。



図 4

9. 染付皿 No. 13・窯ノ辻窯 (武雄市山内町)・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200°C～1250°Cであろう。気泡も多く、大きいが透光性が高い。
- ・呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。



10. 染付絵皿 No. 7・窯ノ辻窯 (武雄市山内町)・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200°C～1250°Cであろう。気泡も多く、大きいが透光性が高い。



図5

11. 染付皿 No.10・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200°C～1250°Cであろう。気泡も多く、大きいが透光性が高い。
- ・呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。



12. 染付皿 No.12・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200°C～1250°Cであろう。気泡も多く、大きいが透光性が高い。
- ・この製品の呉須は発色が悪い。釉薬内の呉須粒子も少ない。
- ・釉薬内の気泡は多く大きい。

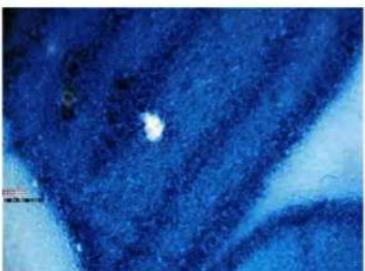


図 6

13. 染付皿 No. 20・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670年代



- ・素地・釉薬は半透明のガラス質化している。中に未溶融の微細な白い粒子（長石・石英？）がわずかに観察される。窯の温度は1200℃～1250℃であろう。気泡は小さく透光性が高い。
- ・素地は素焼きされ、生掛けタイプと比較して気泡の量が減り小さい。呉須粒子・生地は素焼きされ、釉薬内に呉須粒子は確認できず発色も良い。
- ・釉薬内の気泡は天神森窯・窯ノ辻窯に比較して小さい。



14. 染付皿 No. 19・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670年代



- ・素地・釉薬は半透明のガラス質化している。中に未溶融の微細な白い粒子（長石・石英？）がわずかに観察される。窯の温度は1200℃～1250℃であろう。気泡は小さく透光性が高い。
- ・素地は素焼きされ、生掛けタイプと比較して気泡の量が減り小さい。呉須粒子・素地は素焼きされているので釉薬内に呉須粒子は確認できず発色良い。
- ・釉薬内の気泡は天神森・窯ノ辻窯に比較して小さい。



図 7

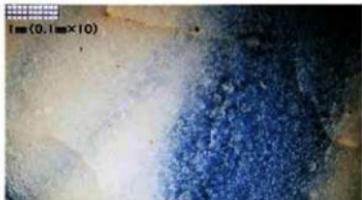
15. 染付碗（東南アジア向）No. 21・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670 年代



・表面染付部・実体顕微鏡+デジタルカメラ拡大撮影（以下同じ）

・素地・釉薬は半透明のガラス質化の中に熱膨張した未溶融の白い粒子（長石・石英？）が数多く混在する。窯の温度は低く 1150°C～1200°C であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。

・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。



16. 染付皿 No. 18・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670 年代



・素地・釉薬は半透明のガラス質化している。中に未溶融の微細な白い粒子（長石・石英？）がわずかに観察される。窯の温度は 1200°C～1250°C であろう。気泡は小さく透光性が高い。

・生地は素焼きされているので釉薬内に呉須粒子は確認できず発色も良い。

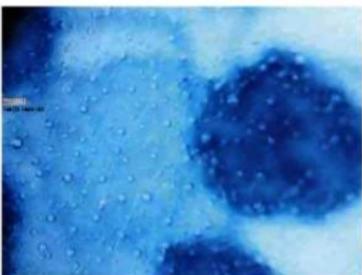


図 8

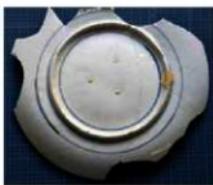
17. 染付皿 No. 16・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670 年代



- ・素地・釉薬は半透明のガラス質化している。中に未溶融の微細な白い粒子（長石・石英？）がわずかに観察される。窯の温度は1200°C～1250°Cであろう。気泡は小さく透光性が高い。

- ・生地は素焼きされているので釉薬内に呉須粒子は確認できず発色も良い。

- ・釉薬上に窯から落下した粘土粒（中央に孔）がある。



18. 染付小鉢 No. 24・柿右衛門窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・線傷は発掘作業時の傷であろう。
- ・釉薬層に未溶融粒子が観察できる。
- ・還元焼成温度に達し呉須の発色は良い。呉須の剥離状態、浮遊粒子はない。還元焼成温度もぎりぎりと思われる。
- ・気泡の透明性は低い。

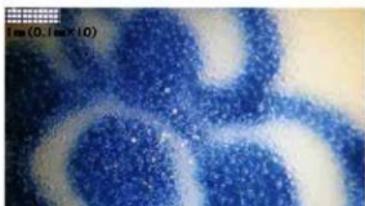


図 9

19. 染付猪口 No.23・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子がある。
- ・還元焼成温度に達し呉須の発色は良い。呉須の剥離、浮遊粒子は気泡が多く観察できない。還元焼成温度もぎりぎりと思われる。
- ・気泡の透明度は低い。



20. 染付皿 No.30・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1740 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子ではなく適正な高温焼成がおこなわれた。
- ・呉須発色もよく釉薬内に呉須の剥離、浮遊粒子が僅かにある。還元焼成も確保された。
- ・気泡の透明性も良い。
- ・線傷は発掘時の傷であろう。



図 10

21. 染付皿（色絵素地）No. 25・南川原窯ノ辻窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子は確認できない。適正な高温焼成が行われた。
- ・呉須発色良い。呉須付近の気泡は大きい。呉須の浮遊粒子がわずかにある。
- ・気泡に透明性は低い。



22. 染付皿 No. 29・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・釉薬層の未溶融粒子は1個、確認された。適正な高温焼成がおこなわれた。
- ・呉須発色もよく釉薬内に呉須の剥離、浮遊粒子はない。還元焼成も確保された。
- ・気泡の透明性も良い。
- ・焼成温度は1200°C～1250°Cであろう。



図 11

23. 染付皿 No. 28・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・呉須の薄い個所の発色は良いが濃色個所の発色は不完全である。呉須の剥離、浮遊粒子はない。
- ・焼成温度は還元焼成温度の前後であろう。
- ・落下粘土粒子がある。中央に水蒸気がでた孔がある。



24. 染付皿 No. 26・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子は観察できない。
- ・呉須発色良い。呉須付近の気泡は大きい。呉須の剥離、浮遊粒子はない。
- ・気泡に透明性がある。



図 12

25. 染付皿 No. 34・樋口窯（有田町）・素焼・1730-1760 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子はなく完全に溶融している。
- ・呉須発色もよく呉須の浮遊粒子が僅かにある。
- ・気泡の透明性が高い。



26. 染付皿（歐州向）No. 33・樋口窯（有田町）・素焼・1700-1750 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子が観察できる。
- ・呉須の発色は良い。呉須の剥離、浮遊粒子は気泡が多く観察ができない。
- ・線傷は発掘時につけたものであろう。
- ・還元焼成温度に近い温度で焼成されたのであろう。



図 13

27. 染付皿（色絵素地）No.32・樋口窯（有田町）・素焼・1730-1750年代



- ・釉薬層に未溶融粒子もなく完璧な仕上がり状態である。
- ・呉須の剥離、浮遊粒子がある。
- ・現代窯業技術と遜色がない。



28. 染付皿 No. 31・樋口窯（有田町）・素焼・1730-1750年代



- ・釉薬層に未溶融粒子が多く散見され適正な高温焼成が確保できなかった。
- ・呉須発色はよく、呉須の剥離、浮遊粒子が観察できる。
- ・気泡の透明度は悪い。

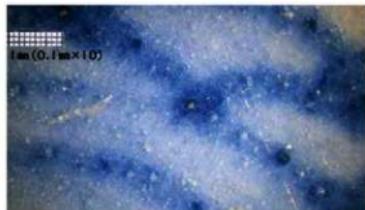
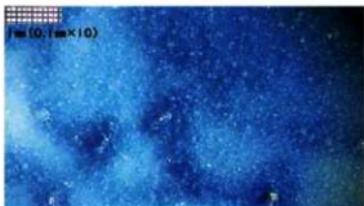


図 14

29. 染付皿 No. 38・樋口窯（有田町）・素焼・1730-1760 年代



- 釉薬層に微小な未溶融粒子が観察される。完全な溶融に至っている。このような状態の製品は現代製品でもある。
- 呉須の発色は良い。呉須の剥離、浮遊粒子は気泡の影響で観察ができない。
- 気泡の透明性もある。
- 釉薬層に微小な未溶融粒子が観察される。完全な溶融に至っている。このような状態の製品は現代製品でもある。



30. 染付皿 No. 36・樋口窯（有田町）・素焼・1740-1760 年代



- 未溶融粒子はあるが還元焼成温度に達している。現代製品でも未溶融粒子はある。
- 呉須の発色は良く、呉須の浮遊粒子が僅かに観察される。
- 気泡の透明性も良い。



図 15

31. 染付皿 No.37・樋口窯（有田町）・素焼・1750-1770年代



- ・完全溶融していない。未溶融粒子が観察される。
- ・真須の発色は良い。真須の剥離、浮遊粒子は気泡が多く観察ができない。
- ・気泡の透明性もわるい。適正な高温焼成が確保できなかつた。



32. 染付皿 No.39・樋口窯（有田町）・素焼・1750-1770年代



- ・未溶融粒子が多く観察できる。
- ・気泡の透明性はやや落ちる。
- ・真須の発色は良い。真須の浮遊粒子は気泡が多く観察が難しい。酸化鉄・酸化マンガンに由来する物質が釉薬表面に浮き出ている。
- ・適正な高温焼成に達していない。

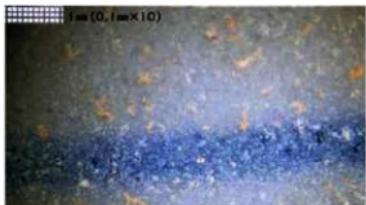


図 16

33. 染付皿 No. 35・樋口窯（有田町）・素焼・1740-1750 年代



- ・高温焼成がうまくいかず全体に未溶融粒子が多い。失敗作の製品である。
- ・呉須の発色は良い。呉須の剥離は浮遊粒子が多く観察ができない。
- ・気泡も白濁している。



34. 染付皿 No. 40・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1790 年代



- ・未溶融粒子がわずかにある。現代製品でも未溶融粒子は存在する。
- ・呉須の発色も良い。完全な還元焼成に達している。呉須の浮遊粒子はある。
- ・気泡も透明性がある。

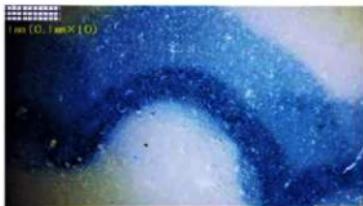


図 17

35. 染付皿 No. 43・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1810 年代



- 未溶融粒子が多く釉薬層の透明度が落ちる。
- 透明度が悪いので呉須の観察は困難である。濃色個所で呉須浮遊粒子が観察できる。
- 気泡も満り透明度が落ちる。



36. 染付皿 No. 44・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1820 年代



- 釉薬層内に未溶融粒子が観察される。
- 気泡が多いが呉須浮遊粒子が観察される。呉須発色は良い。
- 気泡の透明度は落ちる。



図 18

37. 染付皿 No. 42・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1810 年代



- ・呉須の絵は剥離し表層に浮き上がるるもの、浮遊粒子となつて釉薬層内に多くみられる。呉須材料が変わったか？
- ・長石、石英などの未溶融粒子はある。
- ・気泡の透明度は落ちる。・高温焼成は適正である。



38. 染付皿（色絵素地）No. 47・樋口窯（有田町）・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子はない。素地もガラス質で適正な高温焼成に達している。
- ・龍の眼と思われる。呉須の剥離中の段階から浮遊粒子になるまでが分かる。
- ・気泡は透明度が高い。

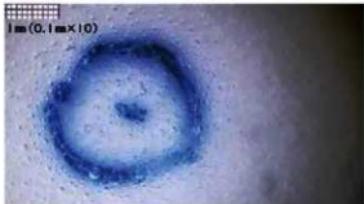


図 19

39. 染付皿 No. 41・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1810 年代



- ・呉須の絵は剥離し表層に浮き上がるもの、浮遊粒子となって釉薬層内に多くみられる。呉須材料に問題がある。
- ・長石、石英などの未溶融粒子はある。・気泡は透明である。
- ・高温焼成は適正である。



40. 染付皿 No. 45・樋口窯（有田町）・素焼・1810-1840 年代



- ・釉薬層内の未溶融粒子が僅かにある。この程度は現代製品でもある。
- ・呉須は全体の浮遊粒子となっている。左側の白磁部との境に乱れた線として残っている。



図 20

41. 染付皿 No. 46・樋口窯（有田町）・素焼・1820-1860 年代



- 釉薬層の未溶融粒子が多い。
- 呉須の発色は良い。呉須の浮遊粒子が多く、左上の線は呉須の剥離段階が分かる。
- 未溶融粒子はあるが気泡は透明度高い。適正な高温焼成より低い。



42. 染付皿 No. 55・樋口窯（有田町）・素焼・1820-1860 年代



- 釉薬内に未溶融粒子ある。右上から右にかけて特に多い。
- 呉須発色は悪い。呉須は剥離状態から浮遊粒子となっている。
- 気泡の透明度も落ちる。還元焼成時に酸素の遮断がうまく行かなかった可能性がある。

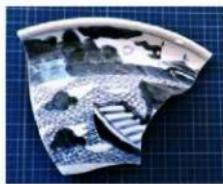


図 21

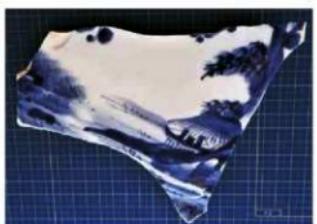
43. 染付皿 No. 50・樋口窯（有田町）・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子が僅かにある。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離し、線は斑状になっている。
剥離した呉須から浮遊粒子に変わりつつあるのも観察される。
- ・気泡の透明度が高い。



44. 染付皿 No. 49・樋口窯（有田町）・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子が僅かにある。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離し斑状になっている。剥離した呉須は浮遊粒子に変わり線が不鮮明になっている。
- ・気泡の透明度が高い。

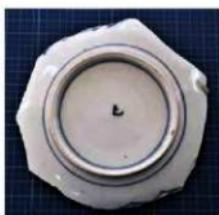


図 22

45. 染付皿 No. 51・樋口窯（有田町）・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層の透明度は高い。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離し浮いているのが分かる。剥離した呉須から浮遊粒子に変わりつつあるのも観察される。
- ・気泡の透明度が高い。



46. 染付皿 No. 48・樋口窯（有田町）・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子が僅かにある。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離し浮いているのが分かる。剥離した呉須から浮遊粒子に変わりつつあるのも観察される。
- ・気泡は透明度が高い。



図 23

47. 染付皿（藏春亭三保）No. 53・樋口窯（有田町）・素焼・1840-1870 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子はない。
- ・呉須は発色良い。呉須は剥離中あるいは浮遊粒子となっている。写真的左側は剥離後の斑状の模様がみえる。
- ・気泡の透明度が高い。



48. 染付皿（藏春亭三保）No. 52・樋口窯（有田町）・素焼・1840-1870 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子はない。
- ・呉須は発色良い。呉須は剥離中あるいは浮遊粒子となっている。
- ・気泡の透明度が高い。



図 24

異須の比較 1 良い（より明るい）色調

6. 染付皿 No. 9・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



13. 染付皿 No. 20・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670 年代



19. 染付猪口 No. 23・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代

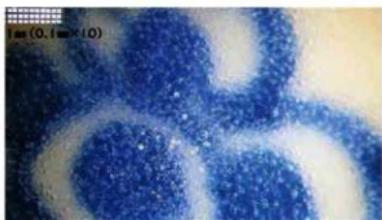
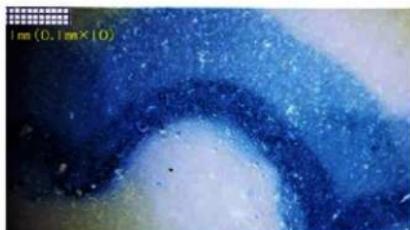


図 25

35. 染付皿 No. 43・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1810 年代



47. 染付皿（藏春亭三保）No. 53・樋口窯（有田町）・素焼・1840-1870 年代



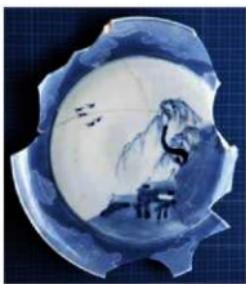
呉須の比較 2 黒ずんだ色調

4. 染付皿 No. 4・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



図 26

17. 染付皿 No. 16・長吉谷窯(有田町)・素焼・1655-1670年代



34. 染付皿 No. 40・樋口窯(有田町)・素焼・1780-1790年代



40. 染付皿 No. 45・樋口窯(有田町)・素焼・1810-1840年代



図27

19世紀後半における有田と三川内の輸出品に関する研究

—薄手磁器を中心として—

鈴田由紀夫

はじめに

海外に輸出された17世紀後半から18世紀前半の肥前磁器は、世界各地の宮殿や美術館などにおいて多く目にすることができる。この年代の製品に次いでみられるのが、19世紀後半の有田焼と三川内焼である。中でも極端に薄く軽く作られた蓋付碗類は、大型の花瓶類とともにその時代の輸出品の特徴を示している。この薄手磁器は原料等の要因により三川内素地が優位とされ、有田に素地が移入されることが行われた。また商社や窯元のブランド銘がこの時代から製品に入れられるようになった。本論考は薄手磁器を中心とした三川内素地の有田焼利用と、ブランド銘の変遷に着目して19世紀後半の製品の特長について考察するものである。

1. 有田と三川内の薄手磁器



図1 盤
蓋
館蔵 (山口裕也氏寄贈)

(1) 三川内素地の有田利用

この色絵碗皿には皿、蓋、碗それぞれに染付で「満宝山枝栄造」と記され、その上から赤絵で「肥磯山信甫造」と記されている。満宝山枝栄とは明治4年(1871)に設立された三川内焼の貿易商社満宝山商舗のブランド銘である。肥磯山信甫とは安政3年(1856)に佐賀藩から許可を得て貿易を開始した田代紋左衛門のブランド銘である。この二つのブランド銘が重なっている製品は何を意味しているのか。

『肥前陶磁史考』に「薄手物の三河内注文」という項があり「真白の色相と、軽き薄手物を愛する欧米人は、有田焼よりも寧ろ三河内焼を嗜好した。然も有田よりは、三河内の方が安価にて、製し得る素地の可能性がある。故に藏春亭の貿易時代より、薄手物の普通級品は、三河内へ注文製作の上、それを有田にて赤絵附を施した物であった。」と記述されている^{注1}。この色絵碗皿はまさにこうした生産構図を証明する資料である。

江戸末期から明治初期にかけて、こうした生産の仕組みにより作られた輸出品は多いと考えられるが、図1のように有田側の製品として仕上げられたものに三川内側の銘を記したものはない。多くは白磁のまま有田側へ渡され、有田で「藏春亭三保造」や「肥磯山信甫造」のブランド銘が上絵付けされて輸出されている。この三川内素地・有田上絵付けの色絵製品と有田素地・有田上絵付けの薄手色絵製品は区別が困難であり、曖昧なまま最終的なブランド銘による製作者を表示しているのが実状である。



図2 大英博物館所蔵
©The British Museum



図3 館蔵
(高取家コレクション)

三川内素地の問題は薄手磁器に限らず、置物においても見受けられる。図2の鯉置物は久富与次兵衛によるもので「藏春亭三保造」の銘がある^{注2}。

図3は国内に伝世した白磁の蛙置物である。素地は白く、釉薬の溜まりが僅かに黄緑色がかかり、目に染付の点を施すなど随所に三川内焼の特徴がみられる。銘はないが、箱書きには「三河内焼 飛龍床置」と墨書きされている。「三河内」という表記は「三川内」と併用され

てきたが、古くは「三河内」の方がより多く用いられている。三川内の窯業は薄手磁器生産とともにこうした細工物を得意とし、置物類に優れた作品がみられる。有田でも17世紀から各種の細工物が作られているが、19世紀においては素地の白さや細工の細かさでは三川内の方が優位である。こうした状況において久富与次兵衛は素地を三川内から仕入れ、有田で上絵付けして輸出した。薄手碗皿ほど事例は多くないが、置物素地の三川内外注は江戸末期の輸出品生産の特色を示している。

久富や田代による三川内素地利用は、貿易商としては合理的な方策であったと考えられる。品質が良く低価格であれば製品の発注は自ずとそちら側に向けられよう。久富は生産組織を持たないが、田代は登り窯を保有し自前の生産組織を有していた。しかし田代も久富と同じく薄手磁器については三川内から仕入れていた^{注3}。この三川内素地に有田上絵付けの手法は、形式上は違法となっていた。前掲書の『肥前陶磁史考』には「勿論宗藩の典法としては、堅く之を禁制されあるも、長崎奉行は国益上の見地より、黙許してゐたのである。」と書かれている^{注4}。販売される有田焼は、素地から上絵付けまですべて有田で完結しなければならないというのが当時の产地の認識である。この認識は商人としての久富や田代にとっては不合理であったと考えられるが、この実態との齟齬が有田の生産者である窯元達の不満となり、田代は慶応2年(1866)に窯元達から糾弾された^{注5}。このことが契機となり明治元年(1868)には、田代の他に長崎輸出の鑑札が9枚増加され、深川栄左衛門などの窯元が新たな貿易商として輸出事業に参入した^{注6}。結果的にみると久富や田代の手法が廃止された訳ではなく、明治4年以降の資料である図1の製品のように三川内と有田の組み合わせは再開しており、糾弾側であった深川栄左衛門も明治6年(1873)のウィーン万国博覧会出品に際して、薄手珈琲器を三川内に注文している^{注7}。

図4の珈琲セットは蘭のマークと深川製の銘が赤絵で入れられている。香蘭社は深川・辻・深海の3つの窯元によって明治8年(1875)に設立され、製品にはどの工場で作られたか分かるように蘭のマークとそれぞれの名前をいれることになっていた。この場合は深川の製品とい



図4 赤絵金彩人物文碗皿揃物 館蔵（山口智也氏寄贈）

マ）錦附二度焼は慶応元年金氏多三郎、田中数之助、今村豊寿、森利喜松、之を始む」とある^{注8}。金欄錦付とは金彩を伴う上絵付のことであるが、恐らく赤絵金彩を意味していると考えられる。二度焼きをするのは赤絵を施したあと一度目の上絵付焼成を行い、さらに金彩を赤絵の上から描いて二度目の焼成を行う方法である。この手法は赤絵と金彩の発色温度が通常は金彩の方が低いため、最初に焼成温度の高い赤絵を仕上げ、金彩を後で施し二度目の焼成は少し低い温度で行う。最初に描いた赤が焼成によって定着しているため、金彩の文様を鮮明に描くことができる^{注9}。この技法が慶応元年(1865)に始められたことになるが、4名の赤絵業者の中に森利喜松の名がある。『三川内窯業沿革史』には「明治五年博覧会出品の目的を以て有田深川栄左右(ママ)エ門より紅茶々碗錦付の注文に接し之か焼付をなし高評を博す 但六ヶ仙画極彩色、赤絵付人森利喜松」と書かれている^{注10}。明治6年(1873)のウィーン万国博覧会に出品するために有田の深川栄左衛門が三川内の森利喜松に六歌仙の文様を施した紅茶碗を発注し、さらに森は「明治九年有田深川栄左右(ママ)エ門より錦付の注文を受け之か焼付をなし大に高評を博す爾來十十余年の間に於ける有田香蘭社発売の金蘭(ママ)付は殆ど氏の手に成る」と記されている^{注11}。図4の揃い物も六歌仙と思われる文様であり、深川栄左衛門から森利喜松に発注された一連の赤絵金彩の製品と推測される。

香蘭社から明治9年(1886)のフィラデルフィア万国博覧会に出品されたリストには、三川内製の「錦六歌仙外葵金欄画二度焼」や「錦二度焼六人武者外葵画」の「カヒ一碗」12揃が載せられている^{注12}。

明治10年(1887)の第1回内国勧業博覧会佐賀県出品目録には「錦二度焼浪夷画」の花生が香蘭社から出品されている^{注13}。また明治11年(1888)のパリ万国博覧会には同社から「錦二度焼武者絵」の花生と「錦二度焼六ヶ仙画」の茶碗が出品されている^{注14}。両者とも多くの錦付けの製品の中で二度焼の製品は極めて少数であるため、かなり特殊な技法であったと考えられる。

図5の花瓶はピクトリア&アルバートミュージアムの所蔵品で、三川内素地に有田の香蘭社で上絵付けを施した製品である^{注15}。底部には「大日本三河内製」と呉須で記され無釉部であるため黒く発色している。その周囲には上絵赤で「於香蘭社（蘭マーク）西山製」と記され、蘭マークは金彩で描かれている^{注16}。

うことになる。碗皿等の素地は薄く作られ、三川内製の可能性は高い。また絵付けは赤と金彩でなされ、これも三川内の得意とする表現である^{注17}。

三川内の色絵については「金欄(ママ)



図5 香蘭社製 「大日本三河内製」(呉須の黒色)、
©Victoria and Albert Museum, London 「於香蘭社(蘭マーク)西山製」
(蘭マークは金彩、他は赤色)

当資料は明治9年(1876)のフィラデルフィア万国博覧会へ出品され、1877年にV&Aが購入したものである^{注18}。製作年代は1875年頃とされている。万国博覧会出品であるため、その前年作という解釈であろう。香蘭社は明治8年(1875)に設立されており、最初期の製品ということになる。蘭マークの形がまだ整っておらず、初期の特徴を示している^{注19}。上絵付けを施した西山は有田中野原の西山孝蔵(前名孫一)と推定され、赤絵屋16軒の一人で明治22年(1889)に55歳で没している^{注20}。明治4年の廃藩によって営業が自由になったとはいえ、香蘭社で上絵付部門まで一貫して整備する前の段階では、各種の工程が外注で賄われていた様子をうかがうことができる。また薄手素地以外にも三川内と有田の連携があったことを物語る資料である。注1 中島浩気 1985年(原著1936年)『肥前陶磁史考』p537

注2 大橋康二名譽顧問のご教示による。またチェコのフルボカ城(Hluboka castle)に類品が2点あり(IDNo755とID不明の同型品)、フランスからの里帰りの個人蔵品もある(表1 No32)。チェコの情報は大橋名譽顧問と山本文子学芸員によって2019年3月に実施された「伝統的有田焼再認識プロモーション事業」在資料所在調査による。

注3 『肥前陶磁史考』p537

注4 同前 p537

注5 同前 p538

注6 同前 p548

注7 高橋久満治 1911年『三川内窯業沿革史』p22、『肥前陶磁史考』p241・539

注8 赤絵金彩の表現は、有田焼においては17世紀末の柿右衛門様式の色絵龍鳳凰文皿にすでにあり、また19世紀の九谷焼や湖東焼において流行しているが、肥前においては有田焼より三川内焼の薄手磁器に多用されている(鈴田由紀夫 2020年「有田の赤絵金彩と九谷焼」p76-80『九谷を拓く』第3号 石川県九谷焼美術館紀要)。

注9 『三川内窯業沿革史』p 21 およびp70 にも類似の表現あり。

注10 佐賀県窯業技術センター寺崎信氏のご教示による。

注11 『三川内窯業沿革史』p 22

注12 『三川内窯業沿革史』p 70

注13 森谷美保 2015年「香蘭社の誕生と『温知図録』編纂を巡ってー納富介次郎とフィラデルフィア万博を中心にー」p30 目録130号、p31 目録141号『明治有田 超絶の美 万国博覧会の時代』論考集

注14 前山博「明治前期、内外博覧会出品の陶磁器についてー佐賀・長崎県行政資料などからー」表1 佐賀県立九州陶磁文化館 1983年『近代の九州陶磁展』p135No87

注15 同前書表2p140No146・147

注16 松下久子 2014年「ヨーロッパに現存する平戸焼についての一考察」p42・43『東洋陶磁 第43号』

注17 松下久子 2016年「明治期の三川内焼顕在化への取り組みについてー国内外の博覧会出品をめぐってー」『長崎歴史文化博物館 研究紀要 第10号』p120 及び図6にはカラー図版が載せられており、銘の色や作品の別面が確認できる。

注 18 前掲書注 13 の p31 目録 155 号の「錦鳳凰金外ダミ松竹梅画」の花生一対 5 寸 5 分が文様寸法ともに該当する。

注 19 鈴田由紀夫 2022 年『香蘭社—歴史と作品変遷—』p17 の蘭マーク変遷図参照。

注 20 『肥前陶磁考』p575

(2) 19世紀における有田と三川内の輸出について

17世紀に始まるオランダ東インド会社による有田焼の海外輸出は、宝暦 7 年 (1757) に公式輸出が終止した。しかし輸出が完全になくなつた訳ではなく、私貿易によって輸出は行われたと考えられる。『皿山代官旧記覚書』には明和 7 年 (1770)・9 年 (1772)、安永 5 年 (1776)、天明 7 年 (1787) の項にそれぞれの時期の輸出状況についての記述がある^{注1}。明和 7 年の項では「近年有田皿山陶器唐阿蘭陀向不景氣」とあり、中国とオランダ向けの輸出が不振であったことが伺える。

三川内については『平戸藩窯（三川内焼）と鶴峰園 三猿』では文化文政の間に「三川内の商人、大野慶介、大野甚造、中里利助等、長崎に往来して蘭人との貿易を為す。」とある^{注2}。また『三川内窯業沿革史』には「天保元年蘭人長崎に来り本山製の珈琲具を嗜好す茲に貿易取引をなす則ち海外輸出の濫觴なり」と記されている^{注3}。天保元年 (1830) に三川内産の珈琲具が輸出され、これが海外輸出のスタートとなっている。同前書には「茲に於て今村楨太郎より領主松浦家に上申し盛に茄菲具を作る領主より役員を長崎に遣し平戸焼物産会所なる物を設置し貿易をなす爾來貿易に従事したる主なる者は福本栄太郎、田中数之助、福本市治、藤本熊二、今村豊寿、椋尾仙太郎、金氏佐五郎、田中喜代作、等にして又椋尾平八郎、口石慶治、古川類造、池田仙之助、中里丑太郎、等は専ら製造に従事せり」とも記されている^{注4}。

三川内焼貿易の切っ掛けとなつたのが珈琲具であったのが注目される。また三川内焼の貿易を管轄する平戸焼物産会所が設置されたとあり、この文脈では設置年が天保元年と断定できる訳ではないが輸出の開始に伴つての行政的な組織の必要性から、天保元年に近いころに設置されたと推定される。以後平戸物産会所は明治 4 年 (1871) に満宝山商舗として民営化されるまで、三川内焼（平戸焼）輸出の窓口となつた。満宝山商舗時代の製品には「満宝山枝栄造」「平戸産枝栄造」「平戸産枝栄製」の銘が用いられている^{注5}。平戸産物会所時代の銘は不詳であるが、恐らく「三川内」や「三川内福本造」「三川内今村造」などのように福本、今村、金氏、田中など輸出の関係者名を伴う銘が用いられたと推測される^{注6}。

江戸末期の三川内地区の生産規模については「弘化嘉永の間、御用焼は勿論、諸方商人よりの注文繁多となり、染付物、赤絵付、捺り物等を盛に製出す。當時御用人十八名、窯業手伝五十一名、赤絵付六戸、三川内山、三百余戸、木原山、江永山、合して五百余戸に及べり。」と書かれている^{注7}。赤絵付が 6 戸とあり、江戸末期に三川内で上絵付けが行われていたことが

示された記録として注目される。有田の赤絵屋が当時16軒であったことからすると、有田の4割近い赤絵付業者がいたことになる。

有田における輸出再興は、天保12年(1841)に久富与次兵衛が佐賀藩から貿易の一手販売の許可を得たことに始まる^{注8}。有田白川の南里嘉十、南川原の柿右衛門や樋口等の一流窯元に製作させ、薄手碗や珈琲碗などの普通物は三川内に注文し、オランダ向けには赤絵で武者絵が描かれたとある^{注9}。この武者絵は江戸末期から明治初期の輸出品ではよほど人気があったと思え、蓋付碗に限らず皿類にも多くみられる。

安政3年(1856)に久富は田代紋左衛門へ貿易商の一枚鑑札を条件付きにて譲り与し、さらに万延元年(1860)にはアメリカなど異国向けの貿易を田代が占有することとなつた^{注10}。しかし久富の藏春亭三保のブランド品が輸出されなくなつたわけではなく、田代の肥磧山信甫銘とともに久富与平(藏春亭西畣)が没する明治4年(1871)までは藏春亭銘の製品は輸出されたと考えられる^{注11}。

明治元年(1868)には前述したように、従来の田代紋左衛門に加えて9名が新たに貿易商として許可された。泉山の深海平左衛門、百田多兵衛、鶴田次兵衛、上幸平の石川太左衛門、大樽の平林伊平、本幸平の深川栄左衛門、武田弥吉、赤絵町の富村森三郎、岩谷川内の山口伊右衛門である^{注12}。彼らのブランド銘は田代に倣って「肥磧山・・」をこの時点から用いたと推測しているが、深海平左衛門は以前から用いている「年木庵喜三」を使ったと考えられる^{注13}。

深川栄左衛門の「肥磧山深川」や平林伊平の「肥磧山伊平」は生産者を特定できるが、そのほかの銘は不明である。伝世品にみられる銘は表4に示した種類がある。

明治4年(1871)に廃藩となると藩の規制が無くなり、窯焼や赤絵屋、貿易商の営業権も自由となつたため生産者や貿易商も増大したと推測される。注1『皿山代官旧記観書』p263・357・266・497・498、個々の内容については表3の年表参照のこと。

注2『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園 三猿』p124

注3『三川内窯業沿革史』p14

注4『三川内窯業沿革史』p14・15

注5表1のNo126～129参照。

注6表1のNo116～125および表4参照。

注7大畑三千夫 1992年『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園 三猿』p129 (原本『平戸焼沿革一覧(田松蒲藩伯爵家文庫編原稿写し)』佐藤独図 1918年)

注8『肥前陶磁史考』p527・528

注9同前書 p528

注10 9 同前書 p530・531

注11 表1のNo1～37および表4参照。

注12『肥前陶磁史考』p548

注13図7及び表1のナーブルステック博物館の所蔵品と銘の使用時期変遷表(表4)を参照。

(3) 薄手磁器について

1830年代から輸出が始まったとされる三川内の薄手磁器は、「薄手」や「薄手物」と表現され、「薄手兜形茶碗」^{注1}や「薄手珈琲器」^{注2}の記述がみられる。明治9年(1866)のフィラデルフィア万国博覧会への香蘭社出品目録には「錦割内外梅画」の「薄手皿附大高猪口」や「染錦附」の「薄手皿附奈良茶」などの薄手表記がある^{注3}。明治10年(1867)の第1回内国勧業博覧会への香蘭社出品目録には「薄手桜画染錦」の高猪口や「薄手 但台皿付」の奈良茶碗などの表現がみられる^{注4}。こうしたことから今回取り上げている製品が有田や三川内で当時「薄手」と呼ばれていたことが分かる。



図6 館蔵
(山口智也氏寄贈)



碗の口径 8.2 cm、
皿の径 11.4 cm



また「天保元年長崎に於て蘭人と貿易を開始するに當て茄菲具の如きは非常に薄手となり身蓋合計の量八匁(ママ)内外の品を製出す」とある^{注5}。兜形茶碗は図6のような跨縁の碗と考えられ、蓋付を基本とする。

碗の身と蓋を合わせて8匁とあるが、1匁は3.75gであるため30gとなる。図6の碗は身と蓋で32gである。ほぼ当時の珈琲具として記載された重量に該当している。碗のみの重量は20g、碗の口径は8.2cm、蓋の重量は12gである。碗の20gを口径で割ると2.4g/cmとなる。皿のみの重量は27g、径は11.4cmであり、径に対する重さは2.3g/cmである。これを薄さについての大まかな基準として他の製品と比較してみると、2g/cm台は最も薄い部類であり、5g/cm台になると特別薄いという感じではなくなる^{注6}。また図6の碗の口径8.2cmは表1の薄手碗の口径が確認できる19点の中では最小であり、他は9.1cmから12.9cmの間であった。



図7 文久2年箱入



館蔵(竹田貞子氏寄贈)



図7は文久2年(1862)の墨書銘木箱入りの蓋茶碗10客内の1点である。碗と蓋にそれぞれ「年木庵喜三製」の染付銘がある。年木庵喜三は江戸末

期から明治にかけて活躍した有力窯元深海家の銘である。当該資料は佐賀の旧家に伝世したものであり、国内向けの実用品である。この蓋付碗の重量は5点平均で194g、碗のみの重量は134gで口径は11.0cm。通常の染付より瑠璃釉の分だけ外側の釉は多少厚くなっている。サイズは図6の碗より口径で2.8cm大きい。図7の重量を口径で割ると12g/cmであり、図6の2.4g/cmに比べてかなり重いと言える。こうした実用主体の蓋茶碗と比べて、輸出専用の薄手碗がいかに特殊な薄手の品目であったが伺える。

三川内焼の産地での薄手磁器の出土例としては、伝世品と一致するものは少ないが、伝代官所跡からの出土陶片がある(図8)。当跡では17世紀後半から19世紀までの各種陶片が出土



8-1 8-2 8-3

図8 伝代官所跡出土陶片
佐世保市教育委員会所蔵9-1 東窯 9-2 西窯 9-3 下窯 9-4 下窯
図9 三川内窯跡出土陶片 佐世保市教育委員会所蔵

しているが、19世紀の薄手磁器も少量出土している^{注7}。8-1は上絵の具の赤で彩色されたもので、金彩を伴わない表現である。伝世品では表1No112の公家文蓋付碗が赤のみによる絵付け表現であり、8-1と同じタイプである。8-2は染付の薄手小碗である。表1No1やNo7の藏春亭三保銘の皿に葉の文様が類似している。8-3は白磁の皿であり、見込に円形の窪みがあることから碗皿の受け皿と考えられる。

伝代官所跡に近接する東窯、西窯、下窯の3窯跡からは9-1から9-4のような薄手磁器が出土している。東窯出土の9-1は、小碗で内面に椿の文様が染付で描かれている。西窯出土の9-2は白磁の小碗であり、素地は白く薄いが熔融により変形している。下窯出土の9-3は白磁の皿であり、内面に碗受けの窪みがある。下窯の白磁皿には釉薬が極めて薄く掛けられ、釉薬の光沢が弱いものがある。これらは素地が白い割に釉薬の艶があまり無く、有田の素地とは明らかに異なって見える。染付小碗の9-4は、細い線描きで公家文が描かれている。三川内の素地は天草陶石を原料とする陶土と、地元三ツ岳から産出する陶石を原料とする陶土（網代土）を混合して作られた。上手物は天草4分に網代1分とされ、下手物は天草と網代が半々とされている^{注8}。

輸出用の薄手碗皿はコーヒー具と書かれているが、この手の蓋付碗はコーヒーを飲むための器として用いた記録は確認し難い。素地が極めて薄いため熱が伝わり、熱い液体を飲むには扱いにくいはずである。ほとんどが装飾品として鑑賞されたものではないだろうか。

コーヒー具のほかに「皿付の高形碗」や「金欄染付高猪口」という表現がある。「皿付の高形碗」は、明治元年(1868)に薄手焼を研究していた深海平左衛門(年木庵喜三)が井鉢及び皿付の高形碗を作製して大いに蘭人と取引したとある^{注9}。また明治6年(1873)のウィーン万国博覧会に満宝山枝栄製の「金欄染付高猪口」が12箇ずつ2組、コーヒー碗とともに出品されている^{注10}。当時の輸出品で蓋付碗とともによくみられるのは図10の高形碗である。「皿付の高形碗」や「金欄染付高猪口」とは図10のような器と考えられる。碗の高台内には赤絵で「三川内 福本造」、皿の高台内には染付で「大日本 岩田造」と記されている。染付の窓絵に上絵の組み合わせであ

図10 館蔵
(山口智也氏寄贈)碗「三川内 福本造」、皿「大日
本岩田造」
碗の口径 8.1 cm、高さ 8.6 cm
皿の口径 12.9 cm

り、赤地に金線で細かな文様が描かれており、二度焼きの赤絵金彩と判断される。

この器種は18世紀の有田焼の輸出品にもみられ、用途は一般にチョコレートカップとされ



図 11 館蔵
(山口智也氏寄贈)

「岩田造」口径 7.9 cm、
高さ 9.2 cm、底径 4.1 cm

ている。図 10 も同様の用途が考えられるが、図 11 のような取っ手付きのカップも作られている。高台内には赤絵で「岩田造」と記され、図 10 の受け皿の「大日本 岩田造」と同じ墨元であろうか。

図 10、図 11 の高形碗はいずれも三川内産と考えられるが、図 12 と図 17 は有田産と考えられる製品である。

図 12 の高形碗は高台内に「藏春亭三保造」の染付銘がある。図 10 や図 11 の碗ほど薄くは



図 12 館蔵
(高取家コレクション)

染付銘「藏春亭 三保造」
口径 9.1 cm、高さ 10.9 cm、
底径 4.3 cm

ないが、内部を覗くと外面の染付が透けて見える。銘の書体は藏の戈づくりが長いのが多い。図 13 と図 14 は染付碗の銘であるが、同様に戈づくりが長く引かれている。また亭の字の丁が下向きに直線的に伸びているのに特徴がある。図 15 は有田の年木谷 3 号窯で表面採集された皿の高台内の銘款である¹¹⁾。



図 13 館蔵
(高取家コレクション)
I66931

図 14 館蔵
(高取家コレクション)
I66933

図 15 年木谷 3 号窯表面
採集
有田町教育委員会所蔵
I66931

有田で出土する薄手磁器は、輸出品にみられるような蓋付碗レ

ベルの薄いものは数が少ない。図 16 は年木谷 3 号窯から出土した薄手染付碗である¹²⁾。素地は極めて薄く作られ、三川内の素地と遜色ない精度である。久富与次兵衛からの注文により「藏春亭三保造」の銘をいたれた製品がこの窯でも生産されたが、こうした薄手磁器は泉山陶石を原

料とする陶土では歩留まりが三川内に比べて不利であったため三川内へ素地が発注されたと考えられる。



図 16 年木谷 3 号窯出土
有田町教育委員会所蔵

図 17 は「肥磯山信甫製」の染付銘を伴う高形碗である。極めて薄く白磁であれば三川内と判断されそうな薄手である。染付による文様が施されており、図 10 から図 12

までの高形碗より 2.5 cm から 4.8 cm 高い大振りのカップである。

有田町内では「肥磯山信甫造」の赤絵銘の陶片は出土しているが、窯跡等から染付銘の「肥磯山信甫造（または製）」の出土例は現時点では確認されていない¹³⁾。よって信甫銘の染付製品だからと言って有田産と断定はできないが、藏春亭銘の薄手磁器が有田の年木谷 3 号窯で

図17 館蔵
(百済正明氏寄贈)

「肥磯山 信甫製」
口径 10.5 cm、高さ 13.4 cm、
底径 5.0 cm

図18 染付高形碗皿
「藏春亭三保造」銘 個人蔵

生産されているため、この製品も有田産の可能性が高い。

図18は図17の高形碗と形状および文様が類似する「藏春亭三保造」銘の高形碗である。皿に描かれた人物文は図17の碗と共通している。図18の碗は受け皿を伴っており、図17の高形碗も皿が付随している可能性がある。

注1『三川内窯業沿革史』p14

注2『三川内窯業沿革史』p22

注3前山博 1983年「明治前期、内外博覧会出品の陶磁器について—佐賀・長崎県行政資料などから—」表1 p133No24・No26『近代の九州陶磁展』佐賀県立九州陶磁文化館

注4森谷美保 2015年「香蘭社の誕生と『温知図録』編纂を巡って—納富介次郎とフィラデルフィア万博を中心に—」p27目録15号・19号『明治有田 超絶の美 万国博覧会の時代』論考集

注5『三川内窯業沿革史』p22

注6重さを計測した小皿類34点のうち表1 No110の2.3g/cmが最軽量であり、No3とNo108の2.9g/cmが次点である。

注7佐世保史談会 2002年『平戸藩御用窯総合調査報告書』p60・61第49図・第50図

注8『肥前陶磁史考』p232

注9『肥前陶磁史考』p548

注10東京国立文化財研究所 1997年『明治期万国博覧会美術品出品目録』p110

注11有田町教育委員会 1997年『枳蔽窯・年木谷3号窯 町内古窯跡群詳細分布調査報告書 第10集』p87PL. 66No3

注12同前書 p60Fig22No2・p71PL. 50No2

注13村上伸之氏（有田町歴史民俗資料館館長）のご教示による。赤絵銘については泉山口屋番所跡から「肥磯山信甫造」銘の胸片が出土している（佐賀県立九州陶磁文化館 2018年『幕末明治 有田の窯商—藏春亭と肥磯山信甫—』p15No60）。

(4) エッグシェル磁器

薄手磁器は卵の殻のように薄いことから卵殻手とも呼ばれる。また欧米では同じ意味合いでegg-shell chinaまたはegg-shell porcelainと呼んでいる。松下久子氏の調べによるとイギリスのタイムズ紙では1845年に卵殻磁器に関する記事が初めて登場し、それ以降に頻繁に掲載されるという^{注1}。1845年の卵殻磁器が日本製かどうかは不明であるが、日本製と判別できるものは論文中の表1によると、1859年5月11日のオークション広告が最初である^{注2}。1860年のオークション広告では何ダースもの卵殻磁器があり、多くの薄手磁器製品がイギリスに渡っていたことになる。万延元年（1860）は田代紋左衛門がアメリカやイギリスなどの異国への権利を占有した年である。また文久2年（1862）にロンドン万国博覧会が1851年に次いで開

催され、駐日英國公使であったラザフォード・オールコックが収集した日本の工芸品を出品した。この万国博覧会関連記事で「全てのヨーロッパの製造業者が驚き憧れる素晴らしい卵殻磁器は、私たちの期待どおり十分に表現されている。」と絶賛されている^{注3}。

卵殻磁器に対する評価が高く、輸出された量の多さを裏付ける記述である。

注1 松下久子「ヨーロッパに現存する平戸焼についての一考察」p37『東洋陶磁 第43号』2014年

注2 同前書 p37

注3 同前書 p37

2. 有田と三川内の薄手磁器の分類

有田と三川内のそれぞれの産地における考古学的な発掘調査においては、薄手磁器についての十分な資料が得られている訳ではない。一方伝世品においては比較的多くの資料が残されている。これらには商社のブランド銘や生産者銘が記されているものが多く、生産の構造や製作年代をある程度考察することができる。

ここでは素地使用の複雑な様相を、①素地成形、②染付施文、③上絵施文、④販売者（最終製作者）の4つの観点から分類して考察してみることとする^{注4}。

表2では①から④までの組み合わせで薄手磁器をAからHまでのタイプに分類している。AからCは素地が有田で作られたものであり、その中でもAは素地成形、染付け、上絵付け、販売の4工程とも満たす染付色絵製品。Cは4つの工程の内、染付けがなく上絵付けのみによる有田の色絵製品。

DからHは素地が三川内で作られたものであり、Dは三川内で作られた白磁素地に有田で上絵付けされた色絵製品。Eは三川内で染付けを行った素地に有田で上絵付けされた色絵製品。

Fは三川内で作られた白磁素地に、三川内で上絵付けされた色絵製品。Gは上絵付のない三川内の染付製品。Hは三川内で染付けを行い三川内で上絵付けされた色絵製品。こうした産物としての種類を今日的な呼び方で言えば、AからEまでが有田焼、FからHまでが三川内焼である。

Aで示した事例1は、型打ちによる薄作りの小皿であり、染付文の上から金彩で装飾されている。染付の銘が「藏春亭三保造」であるため素地は有田産と判断した。また久富が上絵を三川内に発注するとは考えにくいため有田で上絵付けを行い、有田焼として販売したとみなしている。事例2は銘が染付の「肥磯山深川造」であり、深川は窯元であるため素地を有田産とした。上絵付けは有田の赤絵屋もしくは自前の赤絵師に絵付けさせたと判断した。事例3は染付銘が有田深海の「喜三製」であり、上絵が蘭マークの「深川造」であるため有田産に分類した。深海と深川が共同で製作した製品であるため、深海が香蘭社に関わった明治8年(1875)から明治12年(1879)の期間に作られたと考えられる。事例4は染付で香蘭社の蘭のマークが記さ

れ、また上絵は香蘭社が得意とした褐色地の表現であることから有田産とした。

B の事例 1 の染付童子文蓋付碗皿は、「藏春亭三保造」の染付銘入りであるため有田産とした。事例 2 の八角碗皿は A の事例 1 と同様に型打ちにより成形され、「藏春亭三保造」の染付銘がある。事例 1 の碗ほど薄手ではない。事例 3 の高形碗の同様に「藏春亭三保造」の染付銘がある。事例 4 の高形碗は「肥磯山信甫製」の染付銘がある。これは図 17 と図 18 の解説で論じたように藏春亭三保造の高形碗との類似性から有田産と判断している。

C の事例 1 は上絵付けのみの装飾であるが、赤絵で「年木庵喜三造」の銘が入れられ、年木庵の深海家は窯元であるため成形も深海によると判断して C に分類した^{注2}。事例 2 は三組小皿の 1 つであり、赤絵で「肥磯山深川造」の銘が入れられている。素地は三川内の薄手素地上り厚めであるため有田産と判断した。事例 3 の珈琲碗皿は型打ちで輪花に作られている。武者絵が描かれているが D の事例 3 より遙かに厚く重い。薄手には入れられないものであるが、有田素地の武者絵の参考として取り入れた。事例 4 も同様に型打ちによる輪花で、三川内のロクロ引きによる薄手腕よりかなり厚く重い。有田素地の有田上絵と考えられる。

D の事例 1 は「藏春亭三保造」の銘入りであるが、赤絵であるため白磁素地は三川内と判断した。事例 2 も赤絵で「肥磯山信甫製」と記されており、三川内素地に分類した。事例 3 も赤絵の「藏春亭三保造」の銘入りであり、事例 1 と同じタイプである。武者絵は C の事例 4 より丁寧である。事例 4 は赤絵で「肥磯山信甫製」記され、白磁素地は三川内産に分類した。

E の事例 1 は論考中の図 1 で取り上げた製品であり、染付で「満宝山枝栄造」と描かれ、赤絵で「肥磯山信甫造」と記されている。三川内の染付素地に有田で上絵付した典型例である。事例はこの一点であるが、染付文様まで入れた三川内素地の供給は伝世品の少なさからすると白磁素地供給より少なかったと考えられる。

F の事例 1 は図 6 で示した製品である。「大日本平戸産福本造」と赤絵で描かれているため、三川内素地の三川内上絵と考えられる。今回掲載の蓋付碗の中では最も薄くて軽い。事例 2 は赤絵で「三川内」と記されている。六歌仙風の人物文が描かれているが、金彩はなく赤のみの表現である。事例 3 は赤絵で「三川内」と記され、武者絵が描かれている。口縁は無釉であり上絵の赤が塗られている。高台は透明釉で施釉されているため、伏せて本焼きされたと分かる。薄い素地であるため焼成による歪みを避けるための手法である。事例 4 は「平戸産枝栄造」と記され、全体に明るい色調で江戸期の人物文が描かれている。

G の事例 1 は染付で「三川内田中造」と記され、三川内素地の三川内焼と判断される。事例 2 は染付で「平戸産枝栄造」と記され、事例 1 と同様に素地、絵付けともに三川内産に分類される。

H の事例 1 は G の事例 1 と同じ名前で「三川内田中造」と染付で記され、素地が三川内産で

あると分かる。事例2との装飾の類似性から上絵付けも三川内で行われたと考えられる。事例2は蓋に赤絵で「大日本三川内」、碗に赤絵で「三川内福本造」、皿には染付で「岩田造」と書かれている。染付で人物文を窓に描き、周囲を赤地とし、その上から金の線描きで文様を描いている。赤地に金彩は図4で述べた二度焼きの手法で施されたと考えられる。二度焼きは慶応元年(1865)に始まるため、この製品の製作年は慶応元年以降ということになる。事例3も染付と赤絵金彩の組み合わせであり、碗には事例2と同じ「三川内福本造」の赤絵銘、皿には染付で「大日本岩田造」と記されている。事例2と事例3は染付による「岩田造」、図11の取っ手付きカップは赤絵の「岩田造」とあり、黒元であり赤絵付けも行っている陶業者とみられる。しかし事例2においての赤絵は「福本造」であり、製作年代の差なのか作業の分担が一様ではない。事例4は染付で「満宝山枝栄造」と記された色絵の製品である。千鳥が染付で描かれ、金彩を主とした上絵付けが施されている。

表2の分類表を概観してみると有田製のDと三川内製のFが、薄手製品の主流ではないかと思える。共通しているのは白磁素地に華やかな上絵を施した色絵製品であり、伝世品としての量も多い。それらの供給を支えていたのは三川内産の白磁素地であったと言える。また両者ともに武者絵の製品が多いことである。輸出品として外国人の好む絵柄だったことが伺える。赤絵金彩による表現は、伝世品からみると有田より三川内の方が多い。慶応元年(1866)に始まるとされる三川内の上絵黒二度焼の成果もその一因と考えられる。

注1表中に用いた製品についての寸法や所蔵等のデータは、表1の各欄を参照のこと。

注2この皿の銘は上絵で描かれているが、江戸時代は上絵付業が赤絵屋16軒に限定され、窯元(窯焼)である深海家は上絵付けができなかつたはずである。この皿が江戸時代であれば銘は赤絵屋が入れたことになる。しかし銘の特徴は図7の染付銘に似ており、深海による可能性が高い。深海が上絵を公式に行えるのは明治4年(1871)の廢藩以降であり、この皿の製作年代の上限も明治4年となる。絵付けに用いられている紫色や薄墨色は明らかに洋絵具であり、このことからも有田で洋絵具が用いられる始まる明治3年以降の製作と推定される。

3. 有田と三川内における銘の種類と使用期間

有田や三川内など肥前の生産地において、奉納品など特別の製品を除けば製作者の銘を入れる習慣はなかった。製品には「太明成化年製」など中国風の装飾銘を入れるのが一般的であった。ところが19世紀になると有田では久富与次兵衛による「藏春亭三保造」や田代紋左衛門による「肥磯山信甫造」などの銘が入れられるようになる。これらは輸出品のブランド名としての必要性から始められたと考えられるが、9代から10代ごろの酒井田柿右衛門による「酒柿」など必ずしも輸出品に限らない銘入りの製品が作られるようになる。京都の仁清や乾山など他地区においては作者銘を入れる習慣は以前からあったが、有田でもこうした製作者銘を入れる事例が出てくる。ここでは有田と三川内の輸出品に伴う銘款を伝世品で確認できる範囲で網羅

している。これらは薄手磁器以外の輸出品にみられる銘款も取り上げている。

表4は各種の銘の使用時期の変遷を一覧表にしたものである。銘の出現する時期と終止する時期を特定できれば、製品の製作年代をおさえることができる。

(1) 有田の銘款

表中左端の「藏春亭三保」は第1章の「(2) 19世紀における有田と三川内の輸出について」でふれたように天保12年(1841)を上限としている。下限は久富与次兵衛昌常が文久元年(1861)に没しているため^{注1}この年までを実線としているが、厳密な銘の終止年は確認できないため以後は破線としている。次の「藏春亭西畝」は、久富与平の銘である。一般には「西畝」と表記されるが、銘款では異体字の「西畝」と記されている。与平は久富与次兵衛昌常の弟であるが、繼嗣となり宗家を相続した^{注2}。相続した年は久富与次兵衛昌常の没した文久2年と推測されるが、銘の開始はその前から破線で示している。終止は久富与平が没した明治4年(1871)としている^{注3}。

「肥磯山信甫」は貿易を許可された安政3年(1856)を上限としている。銘の下限は田代紋左衛門の長男田代助作の没した明治23年(1890)とした。田代紋左衛門は明治33年(1900)に没したが、輸出業の実務は江戸期から田代助作が行っていたため下限は助作の没年と解釈している。

「藏春亭三保」の銘はほとんどが「藏春亭三保造」であるのに対して、「肥磯山信甫」の銘は「肥磯山信甫造」と「肥磯山信甫製」の両方がある。「造」と「製」の使い分けに明確な根拠はないが、全般に「造」の方が古く「製」の方が新しい傾向がある。「肥磯山」という名称は肥前の皿山を意味し、有田皿山の別称として用いられている。田代紋左衛門の銘以降にみられるようになるが、佐賀藩の貿易の鑑札が増やされると、新規の貿易商が田代に倣って用いたと推測される。

「肥磯山平林」は明治元年(1868)に新しく佐賀藩から貿易の許可を得た平林伊平のことであり、銘の使用上限を明治元年とし、下限は明治26年(1893)の没年とした^{注4}。

「肥磯山深江」は明治元年の新貿易商の9名の中に名前がないため、上限は廃藩の明治4年(1871)とした。深江は泉山の黒元深江鶴次郎のことと考えられ、年木谷3号窯からは「深江製」銘の染付蓋が出土している^{注5}。下限は深江鶴次郎が没する明治22年(1889)とした。

「肥磯山川崎」と「肥磯山南里」も明治元年の新貿易商にその名前がなく、貿易業は明治4年以降と考えられる。川崎の下限は不明であるため、実線の下限の明治20年(1887)と破線の下限の明治23年(1890)も製品の特徴から推定した便宜上の推定年である。南里は江戸末期から明治初期に活躍した有田白川の南里嘉十と考えられる。南里は明治13年(1880)に没してい

るため銘の下限を同年にした^{注6}。

「肥蝶山如仙」「肥蝶山山嘉」「肥蝶山武茂」「肥蝶山春信」「肥蝶山漱月」は明治元年の9名の該当者かどうか不明であり、銘の始まりを明治元年(1868)からの破線とし、明治4年からを実線としている。また実線の下限の明治20年(1887)と破線の下限の明治23年(1890)は、「肥蝶山川崎」と同様に製品の特徴から推定した便宜上の推定年である。「肥蝶山如仙」は「蝶」の字を書き、他の「肥蝶山」の「蝶」と異なっている。また「觀水亭如仙」は「肥蝶山如仙」と同じ業者と考えられ、銘の使用年代も作風から判断して同時期としている。

「再春亭新屋好」と「采真亭圭子製」は作者が不明であるが、製品は肥蝶山信甫造の輸出品に類似し、赤絵で「再春亭新屋好」の銘の入った武者絵高形碗などがある。種口窓跡では「采真亭圭子製」や「蘭谷亭定左造」銘のものがみられるという^{注7}。銘の使用年代は明治前期と推定される。使用期間の表示は上記の「肥蝶山如仙」「肥蝶山山嘉」「肥蝶山武茂」「肥蝶山春信」に合わせている。

「肥蝶山辻」は明治8年(1875)に深川栄左衛門とともに香蘭社を設立する辻勝蔵の銘である。9人の新規貿易商に入っていなかった明治4年(1871)以降と判断され、香蘭社設立までとしている。

「肥蝶山深川」は明治元年(1868)に新貿易商となった八代深川栄左衛門の銘である。明治8年(1875)に香蘭社を設立し、蘭のマークを会社の商標としたため、この銘は明治8年で終止したと解釈できる。しかし明治9年(1876)に開催されたフィラデルフィア万国博覧会に「肥前深川製」銘の色絵龍文大花瓶や「肥蝶山深川製」銘の大皿が出品されており^{注8}、明治8年以前の製品を出品したのか8年以降も暫くこの銘を使用したのは判然としない。よって表では終止年を2年分破線で表示した。同様の用いられ方をした銘に「日肥山深川造」がある。

「深川造」も基本的には輸出の許可を得てから用い始めたと考えられ、また香蘭社設立までの間と解釈される。銘の字数が少なく、小形の製品に記されることが多い。

蘭マークと「深川造(製)」は明らかに会社設立の明治8年(1875)以降であり、明治20年(1887)までは伝世品で使用例が確認されている^{注9}。

蘭マークと「辻製」、および蘭マークと「年木庵喜三製」「喜三製」は明治8年の香蘭社設立に参画した辻勝蔵と深海墨之助・竹治兄弟の銘である。辻と深海は明治12年(1879)に精磁会社を設立するため、この銘の使用期間は明治8年から12年に限定される。

「年木庵喜三製」の銘については図7で示したように文久2年(1862)以前から使用されていたとみなされる。使い始めは不明であり、表中では文久2年の3年前から破線で示している。下限は香蘭社に参画する明治8年までとした。深海平左衛門は明治元年(1868)に新貿易商として許可されており、チェコのナーブルスティック博物館には赤絵で「年木庵喜三製」と記され

た薄手の高形碗が所蔵されている^{注10}。年木庵は優れた技術を持つ窯元であり、泉山陶土を用いた薄手磁器は成形可能と考えられるが、この赤絵鉢は他の草書体の年木庵喜三銘と異なり、楷書体であり稚拙な筆致である。明治元年(1868)に深海平左衛門が輸出業を開始した段階では赤絵屋は自由化されていない時期であり、外注の可能性がある。年木庵は明治8年(1875)に香蘭社設立に関わり、明治12年(1879)に精磁会社を設立するまでは蘭のマークに「年木庵喜三製」「喜三製」を記し、明治12年以降は「精磁会社製之」等の銘を用いた。

注1 生没年については表3の年表参照のこと。

注2『肥前陶磁史考』p554

注3 同前書 p555

注4 同前書 p573・689

注5 有田町教育委員会 1997年『枳蔽窯・年木谷3号窯 町内古窯跡群詳細分布調査報告書 第10集』p70PL.49Nol-2

注6『肥前陶磁史考』p573

注7 陶器全集刊行会 1973年復刊・1937年発行『日本古陶銘款集 全六巻 九州篇』p 145

注8『肥前深川製』銘の色絵龍文大花瓶(ID1897-352)、「肥磯山深川製」銘の大皿(ID97-213)、「肥磯山深川造」の色絵秋草文碗皿(ID97-228ab)などがフィラデルフィア美術館に収蔵されている。色絵秋草文碗皿には「天百号十三揃内」のラベルが貼ってあり、フィラデルフィア万国博覧会香蘭社出品リスト(第1章(1)注13 森谷美保)p30 目録中の「天百号 薄手皿附奈良茶 陶器 染錦秋ノ画 十三揃 三寸二分 肥前有田 深川製 一揃ニ付二円 原價二十六円」に該当する。

注9『香蘭社—歴史と作品変遷ー』p17

注10 表1のNo106・107

(2) 三川内の銘款

三川内の薄手磁器の輸出品にみられる銘款の種類は有田ほど多くはないが、「平戸」や「三川内」という銘から有田と産地を容易に区別できる。また「満宝山」を伴う銘は、明治4年(1871)以降に用いられた銘として製作年代を特定できる。

天保元年(1830)から始まる三川内焼の輸出は平戸焼物産会所で管轄されたが、明治4年(1871)に満宝山商舗に引き継がれるまでの銘は不明である。「平戸」や「三川内」などの銘が入れられた可能性はあるが、確証はない。

表4の左端の「平戸三福寿」は、大英博物館所蔵品の蓋付碗と受け皿に赤絵で記された銘で



図19 大英博物館所蔵

©The Trustees of the British Museum
1986, 1011.14.a-c

ある(図19)。器には金彩で鶯雀と水草文が描かれている。「平戸三」は平戸産の意味と解され、また福寿は吉祥を意味するが「福寿製」と記されているため製造者銘の可能性がある。この銘は類例が希少で、上絵の色数も少なく、輸出品の早い段階のものと推測している。銘の年代の上限は輸

出が始まったとされる天保元年（1830）であるが、「純白なる地質にして紙の如き薄手物を製作することに成功」したのは天保8年（1837）とされるため^{注1}、天保8年以降を実線で表示した。下限は満宝山に引き継がれる明治4年（1871）としている。

「平戸産枝栄」「平戸枝栄」「満宝山枝栄」は上限が明治4年であるが、下限の終止年が不明である。実線を明治20年（1887）、破線を明治23年（1890）としたのはいずれも伝世品の観察により推定した便宜上の表示である。

満宝山関係以外の銘の上限の考え方には、「平戸三福寿」の場合と同様である。下限については福本、今村、金氏、田中の活躍ぶりが『三川内窯業沿革史』にそれぞれ明治末期まで記されているため、明治33年（1900）までの実線としている。

図20は碗に赤絵で「三川内福本造」、蓋に赤絵で「大日本三川内」、皿に染付で「岩田造」の



図20 蓋付碗皿 碗 蓋 皿
館蔵（百済正明氏寄贈）

銘が記されている。文様は共通しているが、書体と書かれている内容もすべて異なる。丸窓の染付文は碗と蓋は同質であるが、受皿は明らかに異なる。また受皿の金彩は碗と蓋より光沢が強い。碗と蓋の金彩は同文であるが、赤地は蓋の方が僅かに明るい。図20と類似する

表1 No116の高形碗皿をみると、染付文の表現が同様に異なっており、碗と皿は別工程で作っている推測される。伝世するうちに組み合わせが変わる可能性はあるが、有田ではほとんどみられない傾向であり、三川内焼生産の分業の特色と思える。

注1『肥前陶磁史考』p239 および表3の年表参照。

4. 製作年代について

19世紀後半における有田焼と三川内焼の製作年代は、銘が記されていればある程度判断することができる。特に有田の場合は久富と田代の貿易開始年、明治元年（1868）の貿易商の追加許可、明治4年（1871）の廃藩による貿易自由化によって各銘の出現時期が推定され、下限は曖昧な部分があるが、全般に製作年代を把握しやすい。また洋絵の具の導入開始がほぼ明治3年（1870）以降と考えられるため^{注1}、絵の具の判別ができればさらに製作年代の幅を狭めることができる。

三川内焼については銘の使用年代を絞ることが困難であるため、表1のNo109からNo127に示したように、有田焼より製作年代の表示が幅広くなりがちである。今後文様や器形の特徴などから製作年代をより絞る必要がある。



図21「安政年新上造」銘皿
館蔵（山口裕也氏寄贈）

図21は赤絵で「安政年 新上造」と記された色絵皿である。薄手に作られているが、三川内産と特定されている訳ではない。素地や上絵の具の特徴から、有田を含めた肥前産とみられるが、安政年間(1854-1860)の資料

として貴重である。素地は極めて白く、重さは37gで口径に対する比率は2.9g/cmであり、他の薄手と比べてもかなり薄い方である^{注2}。上絵の具には青白濁した白盛り絵の具が使われており、上から紫色の斑点が施されている。黒線は灰色がかかり、細いがラフな線描である。赤は濃くて少し光沢があり、裏の銘の色も同質である。緑は薄青と草色の二種が使い分けられている。こうした上絵の具に明治3年(1870)以降洋絵の具が加わることになる。

注1『肥前陶磁史考』p551および『香蘭社—歴史と作品変遷—』p24・25において洋絵の具の導入について論じている。

注2表1の中でNo110の2.3g/cmが最も軽く、2.9g/cmはNo3と共に次点である。

おわりに

薄手磁器を中心に19世紀後半の有田と三川内の輸出品を概観してきたが、三川内素地の有田焼利用については第2章で様々な組み合わせを想定して分類してみた。この表2により考察の視点が多少整理されたと思うが、各種の輸出品を厳密に素地分類するのは現状では極めて困難である。今後は科学的な素地分析によって産地が解明されることが望まれる。併せて洋絵の具の分析も進めば、製作年代の判断もう少し幅を狭めることができると考えられる。

『肥前陶磁史考』や『三川内窯業沿革史』などに書かれている有田と三川内の交流は、銘を伴う幾つか伝世品の事例を示すことである程度検証することができた。こうした現象は、素地の提供に限らず19世紀後半の貿易の状況に応じて窯業の在り方が変化し、明治維新によってさらに産業の形態が激変したことを示している。海外に多く残るこの年代の伝世品の調査が進むにつれ、未確認の銘や製作年代、生産構造の解明が一層進展すると期待される。

この論考執筆にあたり、今回の資料の多くをご寄贈いただいている山口裕也氏・智也氏ご兄弟、その他の各寄贈者の皆様、また当館名誉顧問の大橋康二氏、チェコのフィリップ・スホメル氏、長崎県文化振興課の松下久子氏、有田町歴史民俗資料館館長の村上伸之氏、佐世保市教育委員会の溝上隼弘氏、ロンドン在住の佐藤桂子氏、当館の山本文子学芸員から多くの助言と協力が得られた。記して感謝を申し上げたい。

表 1 有田三川内銘入磁器リスト

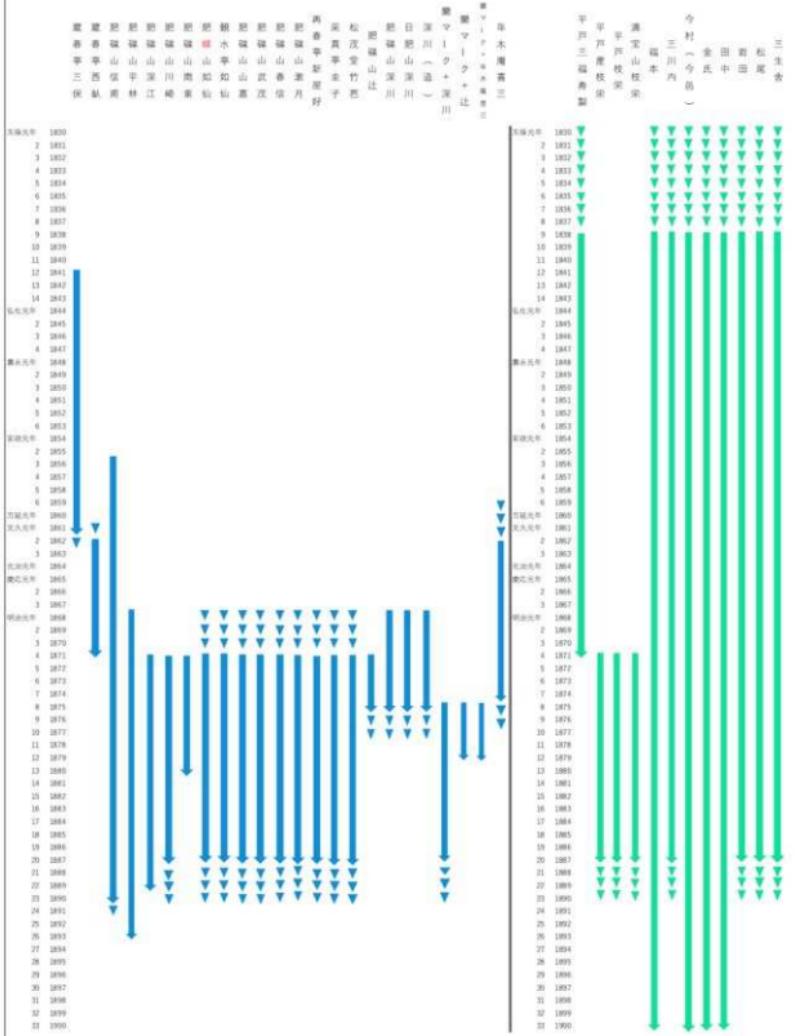
表2 有田三川内素地使用分類表

| | (1)素地成形 ①有田 ②安村 ③上越 ④製造者 ○有田 △安村 □上越 △製造者 | 事例1 | 事例2 | 事例3 | 事例4 | | |
|---|---|-----|-----|-----|-----|--|--|
| A | 有田 有田 有田 6回 | | | | | | |
| B | 有田 有田 - 6回 | | | | | | |
| C | 有田 - 有田 6回 | | | | | | |
| D | 三川内 - 有田 6回 | | | | | | |
| E | 三川内 三川内 有田 6回 | | | | | | |
| F | 三川内 - 三川内 三川内 | | | | | | |
| G | 三川内 三川内 - 三川内 | | | | | | |
| H | 三川内 三川内 三川内 三川内 | | | | | | |

※資料の所蔵・寸法等のデータは表1参照

表3 有田三川内比較年表

表4 銘の使用時期変遷表



柴田夫妻コレクションにみる銘款集成 2

— 延宝様式の時代 —

宮木貴史

1. はじめに

肥前磁器の裏には、「大明成化年製」や「福」などの文字やマークのようなものが染付や色絵で描かれていることがあり、一般に銘や銘款、底裏銘などと呼ばれる。肥前磁器では磁器創始段階から中国磁器を意識した製品作りを行っており、高台内の銘も中国磁器の影響を受けているが、それからさらに転化したものや肥前磁器独自のものなど様々な銘を施す。

柴田夫妻コレクションは肥前磁器を中心とした一大コレクションである。全体で 4,332 件 10,311 点を数え、体系的な収集によって、江戸時代から幕末明治にかけての肥前磁器の変遷を見ることができる。コレクションの 4 割にあたる約 1800 件に銘が施されており、前稿（宮木 2021）から、江戸時代から幕末明治における肥前磁器銘の基礎資料を作成することを目的としてコレクションにみられる銘を集め、分類している。年代などの資料の基本データは大橋康二氏が報告した、『柴田夫妻コレクション総目録（増補改訂）』（九陶 2019）を参照している。佐賀県立九州陶磁文化館では、白く形が端正な素地に、非対称で絵画的な構図と繊細な描き方の絵付けを特徴とする様式が、延宝年間（1673～1683 年）に成立するものとして延宝様式と称している（九陶 1997）。今回はこの延宝様式が成立する前段階から展開後変容していく 1660 年代から 1700 年代までの肥前磁器のうち銘のある 433 件を集成、銘の分類を行う。

2. 銘の分類

肥前磁器の高台内に記される銘は基本的には中国磁器銘の模倣及びそれが転化したものであるが、これを大きく 7 つに分類し細分類を行う。すなわち、(A) 中国の国・年号及びその転化、(B) 吉祥語、(C) 合字・異体字・不明字、(D) 虫・草花等のマーク、(E) 生産地・生産者を表したもの、(F) 和暦、(G) その他、である。以下、分類ごとに年代順で紹介するが、細分類の数字は前稿からの通し番号を付している。なお、文末の（ ）内は該当する作品の図版番号であり、図版として「柴田夫妻コレクション肥前磁器銘一覧②」を付した。

A : 中国の国・年号及びその転化

A 1 :「大明」 中国明朝（1368～1644 年）の国号を表す「大明」を銘としたもの。肥前磁器銘では最初期からみられ、1640～1650 年代に多い銘だが、今回は「太明」と表記されるものが一例のみである。（106）

A 3 :「大明成化年製」 中国磁器銘に倣ったもので、江戸時代を通じて使用された。中国の明

王朝の年号「成化」(1465～1487年)を表す。1630年代から引き続き使用されるが、さらに数が多い。(116、117他)

A5：「化年製」「大明成化年製」から「化年製」の1行3文字を分離した銘。1650年代以降から1680年代までにみられる。(062、069)

A6：「大明嘉靖年製」中国明王朝の「嘉靖」(1522～1566年)を表すもので、1650年代から引き続きみられる。(065、354他)

A10：「宣德年製」中国明王朝の「宣德」(1426～1435年)を表す。17世紀後半にみられ、長吉谷窯跡、柿右衛門窯跡などに出土例がある。(049、078他)

A11：「製」「年製」の「製」だけを分離したもの。柴田夫妻コレクションでは、1655～1670年代に3例みられたが、今回は002のみ。

A13：「嘉」中国明王朝の「嘉靖」(1522～1566年)からとったと考えられる「嘉」のみの銘で、1670年代以降は二重の角枠に入る。二重角枠の銘はいずれも丁寧で書き方に揺れがなく、柿右衛門窯跡の出土例に特徴的な銘である。無枠の「嘉」銘から一步デザイン化されている。(014、149他)

A14：「青」「青」は「青明」や「青明年製」などのように、中国の年号銘から転化したものに使用されることが多い。「青」1字のものは17世紀後半以降にみられるが、柴田夫妻コレクションでは1680年代まで収まる。(015、089他)

A16：「宣明年製」中国明王朝の「宣德」からとて、中国磁器やA17に見られる「大明年製」の「大」を「宣」にしたもの(036、103他)

A17：「大明年製」中国明王朝を表す年号銘。中国磁器銘には古くから使用されるが、肥前磁器銘では1660～1670年代から使用されるようになり、18世紀に顕著となる。(104、199他)

A18：「宣嘉年製」「宣德」及び「嘉靖」から1文字ずつとて銘としたもの。柿右衛門窯跡に出土例があり、17世紀後半に特徴的な銘である。(123、166他)

A19：「宣明成化年製」「大明成化年製」の「大」を「宣」にしたもの。(162)

A20：「太明嘉化年製」「太明成化年製」の「成」を「嘉」にしたもの。208のみ。

A21：「宣真年製」「宣嘉年製」の「嘉」が「真」に置き換わったもの。(239、363)

A22：「嘉靖年製」中国磁器銘にもあり、「大明嘉靖年製」から国号を省略したもの。(241)

A23：「大明化製」「大明年製」の「年」が「化」となったもの。数は少ないが、柴澤コレクションに1680～1720年代の例が1つある(収蔵番号14308)。(295、397他)

A24：「大明萬曆年製」中国明王朝の「萬曆」(1573～1619年)を表す。18世紀以降に多い銘だが、この時代から出現していたことが分かる。(315)

A25：「太明嘉成年製」「太明嘉靖年製」の「靖」が「成」となったもの。(316)

A26 : 「大勝藏化弁製」 325B の1例のみだが、組となる他4点がA3（大明成化年製）であることから、これが転化したものだろう。

B : 吉祥語

B1 : 「福」「福」の篆書体を銘としたものは肥前磁器館の中でも早くから現れる。示偏に「富」が旁となっているとみられるものをB1としているが、細かいバリエーションが多く見られる。

前稿ではB類に限らず最も多い銘だったが、1670年代以降は数を減らしていく。(001, 003他)

B2 : 「福(草書)」 中国磁器にも見られる「福」の草書体でB6より崩れた書体のもの。(059, 086他)

B3 : 「朱+福」「朱」の篆書体を偏としたもので1640年代からあるが、1680年代には終息する。(012, 033)

B6 : 「福(満福)」二重角枠に入り、「田」の部分を満状に描くいわゆる「満福」をB6とした。1660年代から出現し、1670年代以降から18世紀にかけてB1に代わる「福」字銘の主流となる。満三重を典型とし、二重でラフな書き方のものや四重になって粗雑化したものもある。18世紀にはさらに崩れる。(039, 083他)

B7 : 「斤?+富カ」 C21の旁(以下、仮に「斤」と称する)を偏とする福の変化銘。288のみ。

C : 合字・異体字・不明字

C1 : 「示+朱」「朱」の篆書体と「示」の篆書体を組み合わせと考えられ、偏と旁が逆のものもある。1650~1660年代に多かったが、1680年代まで消えていく。(018, 026他)

C19 : 「朱+不明字12」 偏に「朱」の篆書体を、旁に不明字12(図)を入れた銘。(061)

C21 : 「不明字14」「析」の篆書体に似るとされる銘。B1から減画、形式化した可能性を想定している。1660~1670年代に数を増やすものの、1680年代以降消えていく。(022, 024他)

C31 : 「示+米」「示」と「米」とされる文字の組合せ銘。1660~1680年代に収まる。(025, 028他)

C35 : 「不明字25」 原型不明の文字。1660~1680年代に収まる。(010, 021)

C36 : 「不明字26」 二重角枠に入る不明な文字。原型は「嘉」ないし「喜」ではないかと考えている。長吉谷窯跡の出土例にみられ、1660~1670年代と考えられる。(108)

C37 : 「百カ」「百」の増画字と考えられ、1660~1680年代に収まる。(004, 006他)

C40 : 「富カ」 一重の円形枠に「富」とみられる文字が入る。「富」か「福」から転化したものかは不明である。(005)

C41 : 「不明字29」 原型不明だが、「寿」の篆書体の一種に似ている。(008)

C42 : 「不明字30」 二重角枠に入る不明な文字。「示」が簡略化された「福」を想定する。(009)

C43 : 「不明字31」 原型不明の文字。旁はC35に似ており、全体ではC39に似る。(020)

C44 : 「不明字32」 原型不明の文字。区画線を有し、旁には不明字12(図)が入る。(023)

- C45 : 「不明字 33」「舍」を増画したような字。長吉谷窯跡に出土例がある。(035)
- C46 : 「不明字 34」角印の印章のように配置された不明な 4 文字。(067)
- C47 : 「不明字 35」原型不明の文字。何かの篆書体かと考えられるが例は少ない。柴澤コレクションに 1 例ある(収藏番号 14206)。(076)
- C48 : 「不明字 36」原型不明の文字。「黄」や「童」のようにみえるが他に例がない。(109)
- C49 : 「不明字 37」字体から「古へ人」や「古を倣う」と読まれてきた銘(山下 1974)。「斤」を偏とし、旁に「古」「入」「U」を組合せたような文字が二重角棒に入る。多少の違いはあるものの表記ゆれは少ない。1670 ~ 1680 年代に出現し 18 世紀まで残る。柿右衛門窯跡と南川原窯ノ辻窯跡に出土例がある。(113、124 他)
- C50 : 「金カ」「金」篆書体に似る銘。「余」や年木山の「年」とも読まれてきた。C49 と共に 17 世紀後半に出現し、数を増やす。(114、137 他)
- C51 : 「兵カ」「兵」と考えられる銘。柿右衛門窯跡にのみ出土例がある(大橋 1990)。(132)
- C52 : 「不明字 38」「嘉」の上部と C49 の「古」を除いた部分を組合せた銘。数は少ないが、この銘を施すものは丁寧に作られている。(154、194)
- C53 : 「不明字 39」偏に「斤」を、旁に車輪のような文字を入れた銘。C49 などとともにこの時期に多い。B 1 には「田」を円形かつ×で表現したものがあり、B 7 の例もあることから福字の転化を想定する。(160、161 他)
- C54 : 「不明字 40」「者」や「盾」のようにみえるが、他に例がなく定かではない。(429)

F : 和暦

F 2 : 「延寶年製」「延寶」とは日本の元号の一つであり 1673 ~ 1683 年に当たる。「承應式歳」のように特定の年を表記した例を除けば、中国銘に倣った和暦の年製銘の最初である。(247)

3. 銘の消長と器種

柴田夫妻コレクションにみられる銘のうち 1660 ~ 1700 年代では、前の年代から出現したものを含め 47 種類の銘を確認した。この 47 種類の変遷を表 1 にまとめる。

概観すると 1660 年代までと比べて C 類に分類するような銘が減り、特定の銘に統一化されてくる。基本的には A 3 (大明成化年製)、B 1 ないし B 6 (満福) が大半を占めるが、C21 (面) がピークを迎えた後、C49 (面)、C50 (金)、C53 (謹) がこの時期を特徴づける。この 7 種を 1660 ~ 1700 年代における主要な銘と位置づけ、1650 年代からの数量的な変化を示したものがグラフ 1 である。

A 類からみていくと、この年代には A 1 (大明) がほぼなくなり、A 3 (大明成化年製) が主体となる。グラフ 1 からも A 3 は 17 世紀後半にかけて数を増やしていくことが分かる。また、

表1 柴田夫妻コレクションにみられる銘の消長（1660～1700年代）

| 分類 | 1660 | 1680 | 1700 | 銘 | 件数 |
|------|------|------|------|--------------|-----|
| A 1 | | | | 大明 | 1 |
| A 3 | | | | 大明成化年製 | 56 |
| A 5 | | | | 化年製 | 2 |
| A 6 | | | | 大明嘉靖年製 | 4 |
| A 10 | | | | 宣德年製 | 5 |
| A 11 | | | | 制 | 1 |
| A 13 | | | | 萬（無砂） | 1 |
| A 13 | | | | 萬（二重角棒） | 16 |
| A 14 | | | | 青 | 2 |
| A 16 | | | | 宜明年製 | 6 |
| A 17 | | | | 大明年製 | 9 |
| A 18 | | | | 宜嘉年製 | 10 |
| A 19 | | | | 宜明成化年製 | 4 |
| A 20 | | | | 大明嘉化年製 | 1 |
| A 21 | | | | 官真年製 | 2 |
| A 22 | | | | 嘉靖年製 | 1 |
| A 23 | | | | 大明化年製 | 3 |
| A 24 | | | | 大明萬曆年製 | 1 |
| A 25 | | | | 大明嘉成年製 | 1 |
| A 26 | | | | 大明嘉化年製 | 1 |
| B 1 | | | | 福 | 46 |
| B 2 | | | | 福（草書） | 3 |
| B 3 | | | | 朱・高 | 2 |
| B 6 | | | | 酒福 | 106 |
| B 7 | | | | 井・高力 | 1 |
| C 1 | | | | 赤・朱 | 5 |
| C 19 | | | | 朱・不明字12 | 1 |
| C 21 | | | | 不明字14 | 39 |
| C 31 | | | | 朱・米 | 4 |
| C 35 | | | | 不明字25 | 2 |
| C 36 | | | | 不明字26（裏カ） | 1 |
| C 37 | | | | 百力 | 4 |
| C 40 | | | | 國力 | 1 |
| C 41 | | | | 不明字29（裏カ） | 1 |
| C 42 | | | | 不明字30（裏カ） | 1 |
| C 43 | | | | 不明字31 | 1 |
| C 44 | | | | 不明字32 | 1 |
| C 45 | | | | 不明字33（裏カ） | 1 |
| C 46 | | | | 不明字34（四文字角印） | 1 |
| C 47 | | | | 不明字35 | 1 |
| C 48 | | | | 不明字36 | 1 |
| C 49 | | | | 不明字37（古へ入） | 34 |
| C 50 | | | | 壹力 | 21 |
| C 51 | | | | 兵力 | 1 |
| C 52 | | | | 不明字38（裏+古へ入） | 4 |
| C 53 | | | | 不明字39（井・高カ） | 20 |
| C 54 | | | | 不明字40 | 1 |
| F 2 | | | | 區質年製 | 1 |

※A13は棒があるものと二重角棒に入るもので分けている。

1670年代からA13の二重角棒銘とA18（宣嘉年製）が出現する。どちらも柿右衛門窯跡で確認されるが、A18が柿右衛門窯跡に続く南川原窯ノ辻窯跡にも残るのにに対し、A13の二重角棒銘は柿右衛門窯跡にのみみられる（大橋1990）。いずれにしてもC類主要銘とともにこの年代を特徴づける銘と言える。数は少ないが、A17（大明年製）やA24（大明萬曆年製）などの18世紀に盛行する銘も出現している。

B類では、肥前磁器に銘款を施すようになったと考えられる1630年代から使用され続けてきたB1が1670年代以降減少し、B6が1680年代には量的に逆転して主流となって18世纪まで使用される。B6の源流は中国磁器にあるが、福字銘は篆書体か楷書体が主であり、草書体も「田」が渦を成しても一重か二重である。これに対し、肥前磁器では二重角棒に入り三重

グラフ1 1650～1700年代における主要銘の量的推移

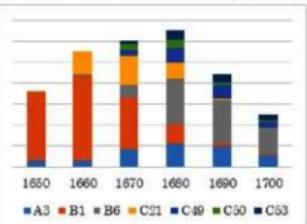
の渦を成す草書体として一定の形態が確立し、多くの製品に使用されている。

C類では、C1（示+朱）やC31（示+米）が僅かに残るもの、C10やC11（「寿福」の合字。いわゆる誓字銘）、C23（米+貢）などの1650～1660年代に見られた銘が確認されない。1660～1700年代では、前半はC21、後半はC49、C50、C53が中心になる。C21は、「一」の下部に「示」と「斤」の篆書体のような文字が二重角棒に入るものを基本とする。区画線が入ったものや一重角棒に入るものなど、多少の表記ゆれはみられるが、B1ほどのバリエーションはない。1670年代から出現するC49、C50、C53は、さらにスタイルが一定で画一化されている。これら主要銘以外でも、1680年代までに消えていくものはラフな描き方で表記ゆれが多く、1670年代以降に出現するものは描き方が丁寧で形態が一定である。

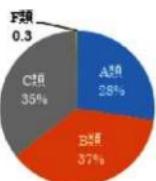
B類、C類の状況を見ても、それまでの初期伊万里や初期色絵の素朴な絵付けや豪快で自由闊達なスタイルから、1670～1680年代を境としてより洗練されたスタイルへの変化と画一化していくことが分かる。その境となった時代は、和暦で年製銘を施す最初の例であるF2（延宝年製）が施された延宝年間に当たる。明清交代の混乱によって中国磁器の影響から脱し、技術的にも文様的にも日本磁器化が進んだこの年代に、銘もまた同じように和風化されていったと言える。

皿類、鉢類、碗類の3種類の器種毎の大分類の傾向をみていく。皿類にはほぼ全ての銘があるが、割合としてB類とC類が同程度を占め、A類がこれに続く（グラフ2）。鉢類はA類とB類が同程度で、C類がこれに続く形となっている（グラフ3）。碗類ではそもそも銘がある資料が8件で、A類の他はB1が1件確認されるのみである。前稿では皿類でB類が53%、鉢類でA類が60%と器種によって差がみられたが、今回は多少の傾向はあるものの偏りは少ない。事例が少ないものの碗類だけは、A類とB類でそれぞれ4割ずつ占めていた段階からA類が抜き出る形となった。A類が碗類に多くなった理由は分からぬが、C類が確認できないことに關しては、この年代の代表的な窯でありC類銘の使用も多い柿右衛門窯跡が、中・小の高級皿を主製品とすることが影響しているのかもしれない。

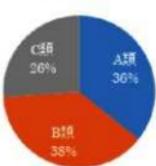
最後に大皿、皿、小皿、手塙皿、碗、鉢（猪口を含む）の器種の細分類における主要銘の傾向について簡単に触れる。佐賀県立九州陶磁文化館では、基本的な器種を形態や寸法によって定義している（九陶2008）。詳細は省くが皿類では30cm以上を大皿、30cm未満を皿、16cm未満を小皿、11cm未満を手塙皿としており、本稿でもこの定義を使用する。皿・小皿については、口縁が花弁状をなすいわゆる「輪花皿」も抽出した（表2）。基本は大分類と器種の傾向と大



グラフ2 皿類における銘の分類



グラフ3 鉢類における銘の分類



グラフ4 碗類における銘の分類

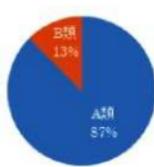


表2 1660～1700年代の主要銘が使用された器種について

| | A3 | B1 | B6 | C21 | C49 | C50 | C53 |
|----------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|
| 大皿 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 皿(輪花皿) | 31(12) | 29(1) | 55(22) | 22(8) | 14(5) | 13(4) | 13(10) |
| 小皿(輪花小皿) | 16(3) | 12(1) | 39(18) | 15(4) | 11(3) | 8(8) | 6(3) |
| 手塙皿 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 碗 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 鉢 | 7 | 3 | 17 | 2 | 11 | 0 | 1 |

差ないが、手塙皿と碗類がどちらもA3とB1に限られている点は指摘できる。検討材料が少ないため、この共通点が何に由来しているのか定かではないが、柿右衛門窯跡での生産状況などが影響している可能性はあるだろう。B1とB6で比較してみると、輪花皿への使用はB6が圧倒的に多いことが分かる。延宝様式には型打ち技法を用いた輪花皿や角皿などが多いため、B1とB6の転換期である1670～1680年代以降に、輪花皿の生産が増えたことが影響していると考えられる。C類はほぼ皿・小皿に集中しているが、C49は皿と同程度、鉢にも使用が見られる。C類の輪花皿への使用もいずれも3割程度だが、特にC50とC53は、それぞれ輪花小皿と輪花皿への使用が多い。

4.まとめ

柴田夫妻コレクションを対象に1660～1700年代の銘の集成、分類を行った。対象範囲の資料数として1157件の作品があり、このうち433件に47種類の銘が確認できた。分類した銘のうち、数としては前稿で最も多かったB1に代りB6が最も多くなる。また、C類が最も多様である点は前稿と同様だが、種類は減ってより洗練された書体の銘に統一されていく。1670～1690年代は肥前磁器が技術的に完成され、日本的な美意識のもとに柿右衛門様式が登場する。その一方で見込の五弁花文や裏文様などに画一化やパターン化の動きも出てくる。銘においても中国磁器に倣つたものから一步日本化したものが使用されるようになり、丁寧に描かれることが多くなる。多様だった銘の種類が減り、画一化されてくる時期が1670～1680年代であることは、肥前磁器全体の流れとも一致する。本稿では一部の器種と主要銘のみだが、細分類での対応関係もまとめた。1対1関係とまでは言えないが、C50とC53の状況は銘と器種の対応関係を考えるうえで示唆的である。今後も引き続き基礎資料の作成を目的として進めていきたい。

引用・参考文献

- 有田町史編集委員会 1988『有田町史 古窯編』有田町
- 大橋康二 1988「17世紀後半における肥前磁器の銘款について」『東洋陶磁』第17号 pp. 25 ~ 37 東洋陶磁学会
- 大橋康二 1990『柿右衛門古窯と17世紀後半の銘款』『古伊万里シリーズI 盛期伊万里の美』pp. 94 ~ 99 古伊万里刊行会
- 大橋康二 1991「肥前磁器の変遷 - 文様を中心として - 」『寄贈記念柴田コレクションII』pp. 87 ~ 95 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 2001「肥前・有田磁器にみる紀年銘について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第89集下巻 pp. 685 ~ 714 国立歴史民俗博物館
- 斎藤菊太郎 1972『古染付 桂端 陶磁体系 第四四卷』平凡社
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1997『寄贈記念柴田コレクションV 延宝様式の成立と展開』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1999『柿右衛門様式総合調査事業報告書』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2008『古伊万里の見方 シリーズ5 形と用途』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2012『古伊万里の文様集成』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2019『柴田夫妻コレクション総目録 (増補改訂)』
- 朱裕平 2018『中国瓷器銘文』上海科学技術出版社
- 開和男 1987『盛期伊万里』創樹社美術出版
- 富永樹之 1998「出土品に見る景徳鎮青花の底裏銘」『青山考古』第15号 pp. 35 ~ 65 青山考古学会
- 水町和三郎 1957『柿右衛門の製品』『柿右衛門』pp. 65 ~ 150 金華堂
- 宮木貴史 2020「柴澤コレクションにみる肥前磁器の銘款について」『開館40周年記念・寄贈記念 特別企画展 柴澤コレクション』pp. 117 ~ 130 佐賀県立九州陶磁文化館
- 宮木貴史 2021「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成1」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第6号 pp. 30 ~ 51 佐賀県立九州陶磁文化館
- 山下朔郎 1974『盛期の伊万里』徳間書店

柴田夫妻コレクション肥前陶磁器銘一覧②

1660 ~ 1680 年代

※ () 内は『柴田夫妻コレクション総目録 (増補改訂)』の目録番号



1660～1680年代



1660～1680年代



1670～1680年代



1670～1690年代



1670 ~ 1690 年代



1670 ~ 1690 年代



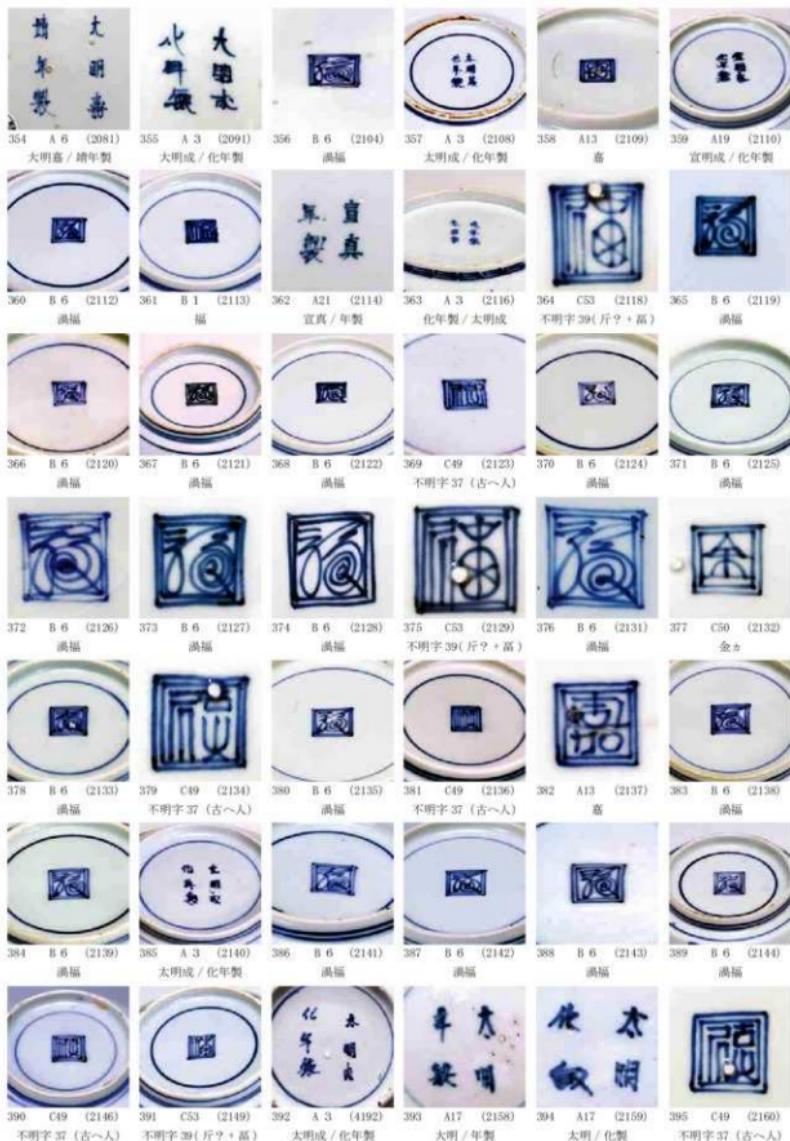
1680 ~ 1690 年代



1680 ~ 1700 年代



1680～1700年代



1680 ~ 1700 年代



執筆者（掲載順）

井上 康彦（植物研究家）

大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館 名誉顧問）

鈴田 由紀夫（佐賀県立九州陶磁文化館 館長）

宮木 貴史（佐賀県立九州陶磁文化館 学芸員）

佐賀県立九州陶磁文化館

研究紀要 第7号

令和4年（2022年）3月18日

編集発行 佐賀県立九州陶磁文化館

〒 844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙 3100-1

印 刷 山口印刷

〒 848-0035 佐賀県伊万里市二里町大里乙 3617-5

BULLETIN OF

KYUSHU CERAMIC MUSEUM

No. 7

CONTENTS

Transition Analysis of *Gosu* (Oxidized Cobalt) in Arita Porcelain Derived from Stereo Microscope Images

• • • Inoue Yasuhiko, Ohashi Koji

Research on Exported Ceramics of Arita and Mikawachi in the Second Half of the 19th Century: A Focus on Egg Shell Porcelain

• • • • • Suzuta Yukio

Meikan Markings in the Mr. and Mrs. Shibata Collection Part. 2 -Style of the Enpo Period

• • • • Miyaki Takafumi

2022

Kyushu Ceramic Museum

Toshaku Otsu 3100-1, Arita, Saga, 844-8585, Japan